

# 調査情報

2014年8月 No.43

筑波総研株式会社

## 1. 産業レポート

「地域活性化」における「女性力」  
—茨城県における女性活躍事例を中心に—

## 2. インタビュー

茨城県における「女性活躍推進」について  
茨城県副知事 山口 やちゑ 氏



## 【産業レポート】

## 「地域活性化」における「女性力」

## —茨城県における女性活躍事例を中心に—

筑波総研株式会社 主席研究員 熊坂 敏彦  
研究員 富山かなえ

## 目次

はじめに	1
1. 「女性力」活用の現状と問題点	1
2. 茨城県における「女性活躍」の状況	3
3. 茨城県における活躍する「女性リーダー」(事例紹介)	4
むすび：「地域活性化」に果たす「女性力」と「女性活躍推進」に向けた課題	27

## ■はじめに

「元始、女性は太陽であった」(平塚らいてふ)。明治末期、「新しい女」と呼ばれた青鞥社の女性たちが「女性解放」を掲げてから100年以上が経過した。この間、時代は大きく変化した。わが国においても、女性は輝きを増し、男性以上に活躍する女性も増えて、「女性力」が高まった。そして現在、わが国においては、「人口減少社会(少子高齢化社会)」の「救世主」として、「女性力」への期待が一段と高まっている。

わが国政府は、「新成長戦略」の中で、「女性活躍」を中核に位置付けている。すなわち、「女性の力」をわが国最大の潜在力としてそれを最大限発揮できるようにすること、「女性の更なる活躍促進」を図ることを掲げている。そのために、①「2020年に女性の就業率(25歳から44歳)を現状の68%から73%にする」、②「2020年に指導的地位に占める女性の割合を現状の6.9%から30%」を達成するという目標を設定した。

改めて言うまでもなく、わが国が予想される「人口減少社会」において「経済成長」を図るためには、女性の就業率を高め、活躍を促進することが効果的である。そのためには、女性の所得を増やして安心して子供を産み育てる社会をつくること、女性の知恵と力を活かしてイノベーションや生産性向上を促進させること等が重要となった。また、女性の所得が増え、消費が増え、税収が増え、年金も安定して、長期的には出生率も上がる。こうして「経済成長」が下げ止まると見られている。特に、地方においては「少子高齢化」のスピードが速いので、「地方再生」や「地域活性化」の施策の中で、「女性活用」への期待がより大きなものになっている。

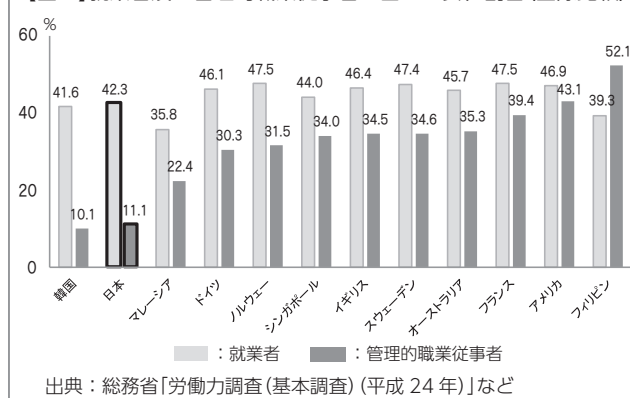
こうした流れを踏まえて、本稿は、「地域活性化」と「女性力」との関係を中心に、茨城県内で活躍する女性リーダーの活躍事例を紹介し、今後の女性活躍推進の一助とするものである。

## ■1. 「女性力」活用の現状と問題点

## (1) わが国における「女性」の活躍状況と「後進性」

わが国の女性の活躍状況を国際的に比較すると、残念ながら、「女性活躍」においては未だ「後進性」が否めない。「男女雇用機会均等法」(1986年)、「育児休業法(現・育児介護休業法)」(1992年)等、わが国の女性が働く環境整備のための法制改革は進んだものの、「女性活躍」の実態はまだ遅れている。就業者に占める女性の割合を見ると42.3%(2012年)と欧米諸国に比べて低い。特に、管理的職業従事者に占める女性割合は11.1%(2012年)と諸外国と比較して極めて低く、韓国10.1%と並んで世界の最低水準にある(図1)。同様に、男女平等の度合い(「ジェンダー・ギャップ指数」)においても、わが国は0.65で136カ国中105

【図1】就業者及び管理的職業従事者に占める女性割合(国際比較)



位と低位にある（世界経済フォーラム「ジェンダーギャップレポート2013」）。

## （2）「経済活性化」と「女性力」

こうした中で、現在わが国では「人口減少社会（少子高齢化社会）」における最重要課題である「成長戦略」の中で、「女性力」への期待を高めている。

### ①女性就業率の引き上げ

生産年齢人口が低下する中で、女性の就業率を高めることが重要になっている。現在わが国の女性（15～64歳）の就業率は62.4%（2013年）であり、国際的に見て低位にある。OECD（経済協力開発機構）は、わが国の女性の労働参加率が男性並みになると、GDPが今後20年で約20%も増加すると試算している（2012年）。また、IMF（国際通貨基金）も、男性と同じ数の女性が労働力人口に加われば、日本では9%程度、経済成長を押し上げる効果が期待できるとしている（2013年9月）。

### ②「M字カーブ」の解消

「女性の労働力化」に関しては、結婚・出産・子育て等の理由により一旦退職する人が多いため、20～30代の女性の有業率がM字型に窪む現象を「M字カーブ」と称しているが（図2）、育児世代の若い女性が就業してこの「M字カーブ」の窪みを解消することが重要視されている。政府の試算によれば、342万人の女性潜在労働力（就業希望者）の就労により、「M字カーブ」が解消できれば、雇用者報酬総額が約7兆円増加し、GDPを約1.5%押し上げるということである。

### ③出生率の引上げ

女性の就業率が高まると、結果的に出生率も向上すると見られている。厚生労働省の調査では、世界的な傾向として、「女性の就業率が高いほど出生率も高い」ことが明らかになっている。日本国内でもこれが当てはまるようだ。2013年の合計特殊出生率は1.43%であるが、政府が目標としているように、50年後も1億人を維持したいとすれば、これを限りなく2.07%に近づ

けていく必要がある。

女性の就労が増えると女性（家計）の収入・所得が増え、家庭の消費支出の7割以上を決定するといわれる女性たちの消費支出も増える。また、消費税などの税収も増え、ひいては年金も安定化する。さらに、出生率も向上する。わが国政府も、このような「経済成長」の「好循環」を期待しているようだ。

## （3）「企業活性化」と「女性力」

「企業活性化」に果たす「女性力」の果たす役割も大きい。そのために、最近、官民あがて様々な「女性力活用策」を打出している。

1つは、「ダイバーシティ（人材の多様化）経営」の推進である。女性活用に取組む企業ほど業績が良い傾向があるといわれる。女性が能力を発揮しやすい、女性の能力を活かす企業風土の実現、多様な人材が能力を発揮しやすい組織づくりなど、「ダイバーシティ経営」の推進によりイノベーションが進み生産性が上がる可能性が高い。

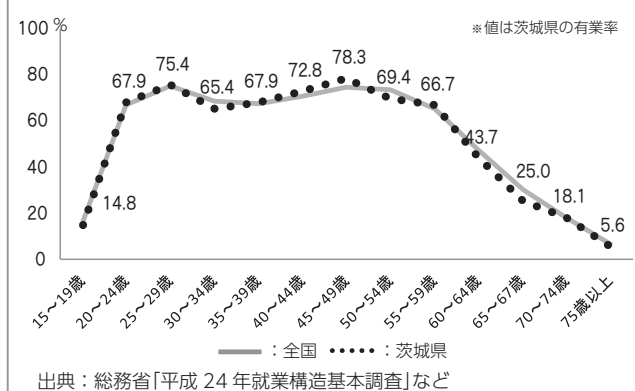
2つは、「ワーク・ライフ・バランス」の推進である。就業を希望する女性が仕事と家庭を両立して働けるようにしたり、男性の長時間労働を是正して家事や育児に参加を促すことである。こうした「ワーク・ライフ・バランス」に取組む企業ほど、職場の業績が良い傾向にあるといわれる。

3つは、「女性の登用」推進である。女性向けの商品開発やサービス開発などを行う企業は成長性が高い。女性の目線でコンセプトを設定し、それに合わせて機能を設計したり、女性の優れた感性を活用して商品・サービスの開発を行う企業の成功事例が増えている。政府も、女性の登用を促進するための環境整備の中で、女性の活躍推進に向けた新たな法的枠組みの構築を検討しており、i) 企業や自治体に、女性登用に向けた行動計画を作ることを求める、ii) 企業に役員や管理職に占める女性の割合を開示させる、iii) 女性登用に前向きな企業に、国の事業を優先的に受注させる等をあげている。

## （4）「地域活性化」と「女性力」

人口減少と高齢化は、地方においてより深刻である。有識者らでつくる「日本創生会議」（増田寛也座長）は、地方から大都市への人口流出が現在のペースで進むと、今後30年間で20～30代の女性が、全国の自治体1800市区町村の約半数に当たる896自治体で5割以上減ると推計している。これを受け、全国知事会は、本年7月15・16日に佐賀県唐津市で開かれた会議で、「少子化非常事態宣言」を採択した。人口減少による地域

【図2】女性の年齢階級別有業率（全国と茨城県の比較）



経済の危機に対応し、国と地方が連携して少子化対策の総合計画を作成し、若い世代の子育て環境の整備等、国と地方が総力を挙げて思い切った政策を展開するというものである。

政府は、「成長戦略」の中核に「地方再生」と「女性活用」を据えているが、全国の地方自治体も、「地域活性化」策として、適齢期女性の県外流出防止、移住・定住促進、婚活支援、子育て支援、高齢者の自立支援、女性による農林漁業の「6次産業化」促進など関連した諸施策を打出している。

## ■ 2. 茨城県における「女性活躍」の状況

### (1) 茨城県における「女性活躍」の状況

茨城県における「女性活躍」の状況に関するデータから、以下のような特徴を見ることができる。

第1に、有業者に占める女性比率が41.1%（全国43.0%）全国45位と低位である。

第2に、女性の管理職比率も低位である。管理職（会社役員・管理的公務員等）の女性比率は13.0%（全国14.0%）全国36位、管理的職業従事者に占める女性比率は11.1%（同13.4%）全国38位、女性有業者に占める管理的従事者比率は0.5%（同0.7%）全国41位、地方公務員管理職の女性比率が3.0%（同6.8%）全国44位などとなっている。

第3に、公職や公務員の女性比率も低位にある。都道府県議会議員の女性比率が6.5%（全国8.7%）全国30位、地方公務員採用者（上級職）の女性比率が20.4%（同24.3%）全国41位などである。

第4は、女性の非正規の職員・従業員比率が60.7%（同57.5%）と高く、全国43位となっている。

第5は、「M字カーブ」は、前掲図2のように、概ね全国平均のカーブと同様であり、子育て期に当たる30歳代前半で65.4%（全国68.2%）と低くなっている。

このように見てくると、茨城県の「女性活躍」の状況は、「保守性」が強く、女性の管理職登用が遅れており、「後進性」が強いと見ることが出来る。すなわち、茨城県においては「男性は仕事、女性は家庭」といった風潮が根強く、女性の就労もパート・アルバイトといった非正規雇用が多くなっている。これは、茨城県の一人当たり県民所得が全国第6位、勤労者世帯1世帯当たり実収入が全国5位と高位にあること、持ち家比率も全国15位と高く、住宅敷地面積は全国1位と、総じて「豊かな土地柄」にあることと深いかわりがあるものと思われる。

(表1) 茨城県の「女性活躍」に係わる主要係数

項目	茨城県	順位	全国
都道府県議会議員の女性比率	6.5	30	8.7
市区議会議員の女性比率	12.0	18	13.4
町村議会議員の女性比率	9.4	20	8.6
地方公務員採用者の女性比率	20.4	41	24.3
地方公務員管理職の女性比率	3.0	44	6.8
管理職（会社役員・管理的公務員等）の女性比率	13.0	36	14.0
女性の非正規の職員・従業員比率	60.7	43	57.5
有業者に占める女性比率	41.1	45	43.0
管理的職業従事者に占める女性比率	11.1	38	13.4
女性有業者に占める管理的職業従事者比率	0.5	41	0.7

(出典) 内閣府男女共同参画局 平成25年12月「全国女性の参画マップ」

### (2) 茨城県の「女性が輝く社会づくり」

茨城県は、知事直轄の組織として「女性青少年課」と、その下に「女性プラザ男女共同参画支援室」を設け、「茨城県男女共同参画基本計画（第2次）いきいき いばらきハーモニープラン」（平成23～27年度）を推進し、①女性の活躍促進、②キャリア形成の支援、③就業・起業の支援、④女性が働きやすい職場環境の整備等の事業を展開してきた。特に、今年度は、「人が輝く元気で住みよい いばらきづくりのために」とうたった県政の重要施策の中で、「世界に開かれたいばらきづくり」・「女性が輝く社会づくり」・「県北地域の振興」の3つを重点施策に掲げている。

「女性が輝く社会づくり」の新しい施策として、本年7月に「ウィメンズパワーアップ会議」（会長・村田昌子茨城県看護協会会長）が立上げられた。産業界、労働界、女性起業家等15名の委員（内女性10名）で構成され、女性の雇用の場における活躍推進やキャリア形成の支援、働きやすい職場環境の整備、就業・起業支援等の方策について検討し、本年度中に県への提言をまとめることになっている。

なお、本レポートとは別に、茨城県政史上初の女性副知事として活躍されている山口やちゑ氏に、「茨城県における『女性活躍推進』について」インタビューをさせていただいた。その内容を本誌に掲載させていただいたので、ご参照いただきたい。



### ■ 3. 茨城県における活躍する「女性リーダー」 (事例紹介)

本稿では、茨城県における活躍する「女性リーダー」を11名取上げ、「地域活性化」との係わりを中心に取組み内容を紹介したい。

11名の選定に関しては、「地域活性化」に係わる①起業家、②農林水産分野の方、③商工観光・まちづくり分野の方、④市民活動・ボランティア関係者などに限定し、茨城県の関連部局や民間企業の女性の識者などから推薦をいただいた方、茨城県内もしくは全国レベル、世界レベルで活躍が注目されている方の中から選ばせていただいた。茨城県内で活躍する「女性リーダー」としては、上記分野以外に、医療介護分野、教育分野、サービス観光分野（茨城県ホテル旅館生活衛生同業組合の「いばらき女将の会」のメンバー等）、女性経営者（茨城県酒造組合加盟の女性経営者等）、文化芸術分野、国際分野等、様々な分野で多くの方々が活躍されておられるが<sup>1</sup>、今後も、継続的に取材をさせていただきたい。

本調査は、本年6月にお一人1～2時間程度のインタビューをさせていただいた。インタビュー項目は、略歴、取組み概要と特徴、成果と地域活性化への貢献、今後の展開と夢などである。今回インタビューに応じてくださった11名の方々に改めて御礼を申し上げるとともに、長時間にわたってお話いただいた内容に

ついて、当方の理解不足と紙幅の関係等から十分記述し切れなかったことをお詫び申し上げたい。

本稿で取上げた11名の事例を一覧表にしたものが表2である。それぞれのリーダーが所属する企業・組織名、所在地、取組みの特徴、活躍分野等を整理した。活躍分野については、①「起業・経営」（「雇用促進」「所得増加」「女性登用」「女性の特性を活かした商品・サービス開発」等）、②「農漁業」（「6次産業化」「地産地消」「食育」「都市農村交流」「グリーンツーリズム」「シニアの自立」等）、③「商工観光」（「まちおこし」「コミュニティ活性化」「商店街活性化」「交流人口増加」等）、④「市民活動」（「ボランティア」「自然環境保全」「教育」等）、⑤「女性支援」（「子育て支援」「女性ネットワーク構築」「自立化支援」等）で区分した。それぞれの分野間で関連性があることや、お一人でいくつもの分野にまたがって活躍されている状況などが一覧できる。

(表2) 茨城県における活躍する「女性リーダー」事例一覧（敬称略）

事例番号	氏名	企業・組織	所在地	特徴	活躍分野				
					起業・経営	農漁業	商工観光	市民活動	女性支援
事例1	光畑由佳	(有)モーハウス	つくば市	授乳服製作販売・子連れ出勤	◎		○	○	◎
事例2	平塚知真子	(株)エデュケーションデザインラボ	つくば市	子育て育児情報誌・ネットワーク	◎		○	○	◎
事例3	嶋原育子	(株)マネジメントシステム	ひたちなか市	システム開発・茨城大学との連携	◎		○		○
事例4	原 範子	いばらき農村女性ネットワーク	神栖市	ピーマン農家・全国的ネットワーク	○	◎	○	◎	○
事例5	横島幸子	下妻食と農を考える女性の会	下妻市	農業振興施設で地元食材の加工	○	◎	○	○	○
事例6	高橋早苗	大洗町漁協女性部	大洗町	漁協婦人部長・「かあちゃんの店」	○	◎	◎		○
事例7	梶山明子	夢ひたちファーム中里	日立市	農産物加工・直売・農家民宿等	○	◎	○	○	○
事例8	及川ひろみ	穴塚の自然と歴史の会	土浦市	NPOによる多様な里山保全活動		○	○	◎	○
事例9	田中さよ子	一日カフェゆらぎ	大子町	大子町商店街の活性化	○	○	◎	◎	○
事例10	塩原慶子	カフェ結+1	常陸太田市	コミュニティカフェ・子育て支援活動	○	○	◎	◎	◎
事例11	長島由佳	地域おこし協力隊（ルリエ）	常陸太田市	常陸太田市内見地区の地域おこし	○	○	◎	◎	○

<sup>1</sup> 茨城県内における清酒製造業界の女性経営者のパワーや活躍状況については、「筑波銀行調査情報」2012年4月号No.34「清酒製造業の現況と老舗企業の革新への取組み—茨城・栃木両県を中心に—」、笠間市の「ギャラリーロード商店会」における女性経営者の活躍状況については、「筑波銀行調査情報」2013年10月号No.40「『ギャラリーロード』で見られる革新的な『まちづくり』の取組み—笠間焼産地における『産地革新』との係わり—」を参照のこと。

## 【事例1】 「授乳服」と「子連れ出勤」の育児ママ支援企業

(有)モーハウス

代表取締役 光畑由佳さん

所在地：つくば市

### (1) 事業概要と略歴



光畑由佳さん

つくば市内の静かな住宅街の一角に、(有)モーハウスの本社がある。女性の視点を活かした「授乳服」を開発したつくば発ベンチャー企業として世界中から注目されている企業である。当社は、「茨城県男(ひと)と女(ひと)ハーモニー功労賞」(2007年)、全国商工会議所「女性起業家大賞」(2009年)、経済産業省「ダイバーシティ経営100選」(2013年)等、数多くの受賞を受け、本年5月には、光畑代表が、2014 APEC Women and the Economy Forumで日本代表の民間スピーカーに選ばれ、授乳服や情報発信についてスピーチを行った。つくばから世界に羽ばたく、つくばで最もホットな女性起業家の一人だ。

代表取締役である光畑由佳(みつはたゆか)さんは、岡山県倉敷市出身、お茶の水女子大学で服飾を学んだ。



APECでスピーチされる光畑さん

社会人になってからは、商業施設のキュレーター、建築雑誌の編集などの仕事を経験。その後結婚し、3児の母となった。育児体験で感じた事が今の仕事に結びついている。

当社の原点は、光畑代表自らの苦い授乳経験から生まれた。その日は、生後1ヶ月の子を連れて友人宅にお出かけ。しかし突然、赤ちゃんは電車の中でおっぱいを求めて泣きはじめ、やむに止まれず車内で授乳することに。その時の戸惑い感、周囲からの視線、そして訪ねていった女性の友人からも「信じられない」との声に、光畑代表は、「子どもを育てる」という自然の行為に、困難なイメージ、不自由さ、焦り、閉塞感を感じたという。まさに、「女性にしか分からない苦しみ」であった。この出来事が「反発のエネルギー」となって、女性ならではの商品開発、「モーハウスの授乳服」が誕生したのであった。授乳服のメリット、すなわち、母乳による育児のメリットは、赤ちゃんが泣いてもすぐに授乳が出来る、荷物が少なくて済む、そのうえ子連れでも仕事が出来ることである。「社会の中でママが生きていくためのアイテム、それが授乳服なのです」そう力強く語ってくださった。

当社は、1997年創業、2002年11月に設立(法人化)し、現在従業員50名(全員女性)。つくば本社に加え、東京の青山にアンテナショップも展開し、都内で働く女性に対して新しい働き方を発信している。

当社は、授乳服の企画デザインを行い、サンプルを作成して、生産は国内何ヶ所かの協力工場に委託生産を行っている。販売は、通販・ネット販売が8割を占める。



つくば本社全景

### (2) 取組み概要

光畑代表は、自分の体験をもとに、お母さんたちの力になりたい、喜んでもらいたいと思い、授乳服を開発したという。「もっと自分のありのままに、本来自

分が持っている気持ちを出してほしい、いきいきと笑えるお母さんになってほしい、子育てってこれで良いんだ」という事を伝えたいと思ったという。

最初は、自分のお財布にあるお金だけで小さく事業を始めたそうだ。自宅を開放しママたちの交流の場を作り販売した。最初は全く売れなかったが、2~3年後に、新聞や雑誌で取り上げられるようになって、授乳服や子連れ出勤が広まってきた、とのことだ。

光畑代表は、つくば市で起業したメリットについて、「つくば市に住むママたちは、キャリアもあり、情報キャッチ能力が高い。自分が楽に自由に子育てを楽しむための授乳服に興味を持ってくれ、使ってみてよければ一緒に情報発信もしてくれた。また、都内からも程良く近く移動しやすいのも利点」と語ってくれた。

さらに、光畑代表は、「仕事も外出も“あきらめない”「子連れ」はもっと自由に、もっと楽しく」をコンセプトとする「NPO子連れスタイル推進協議会」を立ち上げ、育児中のママたちが集えるような地域の女性コミュニティの場の提供も行っている。

### (3) 事業の特徴

当社の事業の特徴は次の通りである。

第1は、女性らしい視点で「授乳服」を開発したことである。光畑代表が開発した商品は、「モーハウス10カ条」に集約される。すなわち、「①すぐに授乳できること、②肌にやさしく、洗濯できる生地を選ぶこと、③変化する体型に対応するデザインにすること、④授乳しやすさのために生地や工程を惜しまないこと、⑤テスト・検品には手を抜かないこと、⑥流行と機能を両立すること、⑦授乳中も服の形状が変わらないこと、⑧常に母親の視点で商品をつくること、⑨授乳口の近くにはホックやファスナーをつけないこと、⑩赤ちゃんの顔を見ながら授乳できること」である。これら光畑代表やスタッフの経験が原点となって作られた信条をもとに、授乳期のママと子どもたちを、社会全体で守るための授乳服は作られている。



職場の風景 (子連れ出勤・授乳中)

第2は、「子連れ出勤スタイル」という「新たな就業スタイル」を先駆的に導入し、授乳期ママたちの就業を支えていることである。当社の本社では赤ちゃんの泣き声が聞こえ、床を這い這いする子どもがおり、パソコンに向かいながら授乳をしているスタッフがいる。光畑代表は、話題を呼んだこの「子連れ出勤スタイル」については、事業開始当初から当たり前の風景であったので、取材を受け初めて「これは、当たり前のことではなく、すごいことなんだ」と気付いたという。「ワークライフバランス」という言葉に違和感を覚えるとしたら、ワークとライフが表裏一体の関係で、その対極にある両者のバランスを取る、というイメージが浮かぶという。ワークもライフもミックスしてしまう、その手段の一つが「子連れ出勤スタイル」なのだ。

### (4) 今後の展開と夢

今後の事業展開は、「授乳服中心」にこだわっていききたいということだが、「ユニバーサルデザイン」にも配慮したい考えだ。例えば、青山ショップのお客様で、乳がんの手術をされたおばあさんから、「やっと自分に合うブラを見つけた。10年間ずっと探していたの」と大変気に入っていただけたことがあったという。この事がきっかけとなり、乳がんの方々を応援していくことも決めた。

光畑代表の「夢」は、「女性と授乳期のママたちをお客様として、多くの女性に対して、ライフスタイルの変化に応じて、無理なく働き続ける方法があるということ」を発信していきたいです、そして「子育てはこんなに楽しい、授乳はこんなに楽なんだということに気づいてもらうことです」とお話しされた。モーハウスの授乳服を購入したママから、「大変着やすく、これなら何人でも子どもを産めそうです」とお便りももらうこともあるという。この「社会と繋がり続けることが出来る授乳服」は、今後も女性たちの強い味方となることだろう。



今後の夢を語る光畑代表



## 【事例2】

## 主婦力を活かして、つくばを「テレワークの街」に

(株)エデュケーションデザインラボ

代表取締役 平塚知真子さん

所在地：つくば市

## (1) 事業概要と略歴

TXつくば駅から徒歩10分、つくば市小野崎のテナントビルの一角に、知的な主婦たちを活かして事業を拡大し続ける会社がある。筑波大学発ベンチャー企業の(株)エデュケーションデザインラボである。



平塚知真子さん

代表取締役である平塚知真子（ひらつかちまこ）さん（46歳）は、神奈川県川崎市出身の「よそ者」である。早稲田大学第一文学部で教育学（社会教育）を学び、社会人になってからは、スターツ出版で広告営業に携わった。その後、公務員の男性と結婚し、2児の母となった。

夫の転勤で山形市に住んだ。この地で彼女に1つ目の転機が訪れる。初めての土地で自分が子供と出かけて印象に残ったお出かけスポットや遊び場を情報誌としてまとめ、山形市の生協から出版したのだ。大変好評で、3,000部を一年で完売した。

1998年につくば市に転勤。山形での経験を活かし、育児情報誌が無かったつくば市で、1999年に、育児情報誌「ままとーん♪」を創刊。つくば市に住む母親たちの能力は高く、内容の濃い情報誌が出来た、と振り返る。このNPO活動は、「楽しく、成長できる場」となり、夢も、雑誌編集発行、イベント企画開催、施策提言等へ広がっていったという。この時の経験から「一人で出来ないことも、仲間がいれば実現できることに気づいた」という。2002年、子育て真っ最中の母親によるボランティア団体は「NPO法人ままとーん」となり、初代表理事に就任した。

その後、2003年に再度転機が訪れた。六本木に事務所を置く中間支援組織「日本子どもNPOセンター」の事務局次長に就任にしたのだ。1年間、つくばから往復4時間かけて通勤した。そこで人脈が広がり、今の仕事にもつながる出会いもあった。国立情報学研究

所の新井紀子教授との出会いである。新井教授は、国が公的教育機関の情報化のために開発し、基盤システムとして無償で提供している「ネットコモンズ」を開発された方である。平塚氏は、その「ネットコモンズ」を全国の子育て支援団体にぜひ紹介してほしいと依頼され、モデル事業を実施した。その縁で、2003年から3年間、国立情報学研究所の新井研究室に研究支援員として勤務し、「ネットコモンズ」の操作マニュアルの執筆や操作研修講師を担当することになった。在職中、新井教授に、「現状よりもう一步成長したいなら、大学院に入って修士号をとればよい。そうすれば専門家になれる」とアドバイスを受け、2005年に筑波大学大学院教育研究科に入学し、教育学の修士号を取得することにした。



「ネットコモンズ」のマニュアル

(2) 取組み概要

大学院2年目の2006年秋、「筑波大学発ベンチャー」として、当社を設立した。当初は、育児情報誌の出版や高校受験用のガイドブック「教育ガイドブック」等を発行してヒットさせた。

その後、中心事業を転換し、「ネットコモンズ」に係る「ワンストップショッピング企業」、すなわち導入サポート、システム保守、更新代行等の運用サポートなどを行う企業になった。全国の教育機関、企業、NPO法人等200の顧客向けに、コンサル、システム構築、データ移管や更新、研修などの業務を行っている。

さらに、つくば市に住む優秀な女性を活用して「テレワーク事業」にも乗り出し、売上げでは5割を占める主力事業に成長させた。平均年齢30代後半の子育て世代の女性50人による高校受験模擬テストの採点請負業務と研究データ入力請負業務である。国立情報学研究所はお得意様で、自然言語処理等の多くの請負実績がある。

## (2) 取組み概要

大学院2年目の2006年秋、「筑波大学発ベンチャー」として、当社を設立した。当初は、育児情報誌の出版や高校受験用のガイドブック「教育ガイドブック」等を発行してヒットさせた。

その後、中心事業を転換し、「ネットコモンズ」に係る「ワンストップショッピング企業」、すなわち導入サポート、システム保守、更新代行等の運用サポートなどを行う企業になった。全国の教育機関、企業、NPO法人等200の顧客向けに、コンサル、システム構築、データ移管や更新、研修などの業務を行っている。

さらに、つくば市に住む優秀な女性を活用して「テレワーク事業」にも乗り出し、売上げでは5割を占める主力事業に成長させた。平均年齢30代後半の子育て世代の女性50人による高校受験模擬テストの採点請負業務と研究データ入力請負業務である。国立情報学研究所はお得意様で、自然言語処理等の多くの請負実績がある。

## (3) 事業の特徴

当社の特徴、そして平塚社長の取組みの特徴は、次の通りである。



社内風景

第1は、事業を展開する上で、「女性を活用すること」にこだわり抜いている点だ。社員も「全員女性」である。平塚社長は、「私は、雇用も含めて女性の支援をしたいと思っています。女性は家庭内にいると、どうしても慎重になり、世界を自ら狭くしてしまいがちです。優秀な女性を社会で活用し、活躍の機会と場を創出することで、彼女たちに自分をもっと世の中に貢献することに気づいてもらいたい。私の役目は、その羽ばたきを助けて軌道に“乗せる役”だと思っています」と語る。

第2は、「テレワーク業務」に女性の特性を活かそうとしていることだ。「テレワーク業務」は、指示をきっちり守ること、ミスが無いこと、正確であること、自分勝手な判断をしないこと等が求められ、こつこつと忍耐強く、細かく気を配る作業が得意な女性向きの仕事として評価している。加えて、「つくばに住む女性は、“研究学園都市”のおかげか、能力の高い主婦が大勢います。彼女たちは知的好奇心が強く、優秀です。また、つくばの女性は、子どもたちへの教育も含め、総じて家庭も大事にしている方が多い。そして真面目で精度の高い仕事ぶりで、自分に高い目標を課してミスをしないようにしよう、という真摯な姿勢も見られます」と話された。当社がデジタル採点事業を



始めて、今年で6年目となるが、委託先の中で、当社の正確性が非常に優れているとの評価を得て、委託先からの信頼度がますます高くなっているという。

第3は、「教育事業」にも力を入れていることだ。つくば市で小中学校の保護者や児童生徒向けに「子供のネットトラブルを防ぐ方法」など、講演活動を行っている。デジタル社会における新しい教育の必要性について持論を展開する。教育学の知識と自らの子育て経験や、その後の人脈による情報収集が活かされた結果だ。

#### (4) 今後の展開と夢

平塚社長は、「女性×仕事×ネットワーク」の3つを自身の専門分野、社会に対して影響を与えられる分野であるとされる。そしてコミュニティにおける情報発信と共有を、アナログとデジタルの両面でサポートすること、そして女性テレワーカーの育成と活躍の場づくりが、自分らしい事業の方向性と考えている。「最近、自分の事業方向と社会・地域貢献活動とが一致してきました」と目を輝かせた。

平塚社長の「夢」は、「つくばを『テレワークの街』にしたい」ということである。「つくばを、女性の在宅ワーカーのモデル地区とし、新しいビジネスモデルをつくりたい。従来の「フルタイム職員が在宅（テレワーク）でも働ける」というモデルではなく、在宅ワークは、組織の定型業務を定期的にアウトソーシングしてもらい、顧客組織のパートナーとなることにより収入を得る。さらにはテレワーカー自身がネットワークを作り、コミュニティや組織を活性化させる主体と考える。当社は、在宅ワーク希望者を募り、トレーニングして、教育・研究機関や企業の仕事を受託し、チームワークでテレワークをする。テレワーカーは、HPと紹介により募集し、全員、面接をする。月に1回、会議を行い、直接会う機会を設けている。デジタルな仕事であるが、顔見知り、仕事仲間になるというアナログな人間関係を構築し、協力して仕事ができる体制を作ることが重要だ。年に1回は、全員研修、食事会、表彰式などを行って連携を深め、仕事を通じて自分自身の成長を実感できる場と機会を創出していく。このように、平塚社長は仕事の夢を、熱く語って下さった。

さらに、「これからも自分のためだけではなく、顧客や社会が喜んでくれて、収入増につながる『三方良し』の事業を展開していきたいです。地域の女性一人ひとりが夢を持ち、仲間になって、世の中を良い方向に変えて行くような人になってほしい。私はそのお手伝いが出来たら嬉しいです」とまぶしい笑顔で語られた。



## 【事例3】

## ひたちなかの女性「ゼロ・ワン起業家」

(株)マネジメントシステム

代表取締役 嶋原育子さん

所在地：ひたちなか市

## (1) 事業概要と略歴

日立製作所の工場が数多く立地するひたちなか市。市内を走る那珂湊線の日立工機駅近くのビル内に(株)マネジメントシステムの本社がある。



嶋原育子さん

代表取締役の

嶋原育子（しぎはら いくこ）さん（55歳）は、日立市出身のひたちなか市育ち。茨城キリスト教短期大学を卒業し、日立製作所に事務職として就職した。工場の設計部門でコピーとりとお茶汲みが仕事。嶋原社長は、入社2年後、「私に仕事をください！」と会社に直訴し、めでたくソフト開発部門に異動した。そして、この部署でのノウハウが、現在の仕事に繋がっているという。

その後、体調を崩し日立製作所を退職。25歳で再就職したベンチャー企業・ソフト会社で、彼女に転機が訪れた。入社3年目のある日、社長から「起業してみないか」と勧められたのだ。一時はお断りしたが1年後、再度打診され、悩んだ末29歳の時に、「まず一人で始めること」、「半年以降に社員を雇うこと」、「資金は自分で出すこと」という3つの厳しい条件のもと、



本社ビル全景

インターソシオシステム（株）というソフト会社を立ち上げた。

前の会社の一室を借り、営業は自分で、口座開設は前の会社経由という形で、日立グループの仕事を中心にスタートした。医療用分析装置の組込みソフト開発、工場の生産管理用のプログラム作成等が中心で、派遣業務と請負業務を半々で行うことを経営方針とした。

その当時、学生時代の知り合いと結婚し、子供も2人に恵まれた。産休は6ヶ月、1週間に5～6時間程度の最低限の業務に絞り、6ヶ月後には仕事に復帰したという。「当時も今も、実母の協力があるからこそ、自分の仕事を優先できる」と話された。また、夫の手伝いは特には無いが、理解はあるという。家族の協力と理解が、働く女性起業家・嶋原社長を支えてきたようだ。

また、嶋原社長は、本業の傍ら、茨城県中小企業同友会も代表幹事に就任し、全国を回って「経営指針」の作成等に尽力された。

## (2) 取組み概要

嶋原社長は、その後2009年に、22年間経営したインターソシオシステム（株）を長年共に働いてきた社員に譲渡した。その時の心境は「父親が娘を嫁に出す気持ちに似ています」という。そして、「私は、企業を成長させるタイプではありません。0(ゼロ)→1(ワン)、何もない状態から企業を作り出すことに喜びを感じる『立上げ屋』なんです」と言われる。

その言葉が示す通り、嶋原社長は、2009年12月に、人生で2回目の起業をすることになる。その会社が当社、(株)マネジメントシステムである。

この会社は、前の会社とは、お客様が重複しない仕事をするため、WEB系、クラウドシステム分野にした。また、地元を元気にすることを経営方針の柱にしていたので、中小企業の基盤業務をつくらうとした。まず取組んだのが、ネット販売のサイトの立上げで、茨城県産品を紹介・販売する「つくばデッセ」だ。なぜ「つくば」かと



いうと、「茨城」より「つくば」の方が知名度が高いのでそのブランド力を利用したということだ。しかし、残念ながら、立上げ早々に東日本大震災に直面し、「風評被害」等により茨城県の食材が売れなくなった。

その後、時刻表データを基にどの電車がどこを走っているかが一目でわかるシステム、「見え鉄」を開発した。「見え鉄」は、鉄道ファンに人気があり、広告料収入を収入源としているものである。また、茨城高専専用の就職案内システム「縁JOB」なども開発。次々に新製品を開発中である。

さらに現在は、知り合いの茨城大学の教授から「一緒に研究しないか」と誘われ、茨城大学工学部大学院博士課程に入り、交通分野の研究室に所属して、GPSを利用した新たな交通システムの開発に大学や行政と一緒に取り組んでいる。

### (3) 事業の特徴

鳴原社長の取組みの特徴は、次の通りである。

第1は、会社の立上げが好きな、根っからの「起業家」タイプであることだ。ご本人がおっしゃるように、「0→1」、何もない状態から企業を作り出すことに喜びを感じ、立ち上がった企業を、何の惜しみも無く社員に譲渡すると言った思い切り方も卓越している。

第2は、「反発のエネルギー」をバネにして、「男性社会」で堂々と戦ってきたことである。起業をするにあたり、女性であることで相当「差別」を受けたり、嫌な思いをされたようだ。

「20世紀に起業したころには、女性が新会社を立ち上げることに對して、銀行は融資を拒む時代でした。『女性社長だから、ご主人の署名捺印がほしい、男の方を連帯保証人に入れて欲しい』と言われたこともありました」という。今では考えられないことである。「女性は、借りたお金は絶対に返すと思います。女性は大きな賭けもしないし、無理の無い範囲で着実に事業を進めます。女性の方が堅実だと思います。女性は、会社も子どもも同じで、守りながら育てようというと思いますが、男性は一発逆転を狙いがちです」と女性社長ならではの意見を語って下さった。

しかし、21世紀に入ると社会の構造的な変化を感じたという。21世紀は「女性の時代」となり、今までは会合などで意見を述べると「女のくせに」と言っていた人たちが、「僕も同じことを考えていた」と同意するような場面が増えたという。鳴原社長は、その感覚を「グレーからオレンジになった」と表現された。

第3は、鳴原社長は、「周りが放っておかない人」である。最初に起業に至った経緯、大学院に入り大学と共同研究をするようになった経緯等、鳴原社長なら

ではのものであり、そして、個人的にも仕事も「ネットワーク」の形成力が優れているということだ。

### (4) 今後の展開と夢



本社の玄関前にて

鳴原社長の今後の事業展開は、GPSを利用した新たな「交通システム」構築を進めていくことである。たとえば、幼稚園や保育園の送迎バス、お年寄りのデイサービスの送迎、オンデマンドタクシー、コミュニティバス等である。当社の開発を、こうした「交通」分野に特化させ、「交通」を業務に柱にしたい考えのようである。この分野は、社会的ニーズが高い分野であり、今後の地域社会の発展に大きく貢献する分野である。

鳴原社長の「夢」は、「私は人と係わることが好きであり、80歳まで外に出て仕事をするのが夢です。家には、仕事で得られるワクワク感は味わえません。私は社会から受ける刺激が何よりも生きるパワーになります」とチャレンジ精神旺盛な「わかもの」のまなざしで語って下さった。



## 【事例4】

「ピーマンを愛すること」は「地域を愛すること」

銚田地域いきいき女性の会 会長  
 いばらき農村女性ネットワーク 会長  
 全国生活研究グループ連絡協議会 会長  
 原 範子さん  
 所在地：神栖市

## (1) 事業概要と略歴



原 範子さん

茨城県の東南部、太平洋と利根川にはさまれた神栖市（旧波崎町）は、温暖な気候と砂質の土壌をいかした施設ピーマンの全国一の産地である。当地には、約300軒のピーマン農家がある。ここで、夫婦でピーマン農家を営みながら、「銚田地域いきいき女性の会」会長、「いばらき農村女性ネットワーク」会長、「全国生活研究グループ連絡協議会」会長等、多くの要職に就き、地域振興活動に取り組んでいるたくましい女性がいる。原範子（はらのりこ）さんだ。本年6月27日には、首相官邸にて「平成26年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰」を受賞した。

原さんは、千葉県旭市出身、地元の町役場職員を経て、同年齢のご主人と結婚、神栖市に嫁いできた。

原家の農業経営は、ピーマン、メロンなど施設野菜98a、33棟、水稲270a



ご主人と作業場にて

で、夫婦と実習生2名、パート1名の5人で運営している。原さんの毎日の生活は、午前4時起床、農作業をして、空き時間を見つけては諸会合に出掛ける多忙な毎日だ。ご主人と二人三脚で農業を営んでいるが、「私と夫との約束は、『隠し事をしないこと』と『外に出てもいいが家に迷惑をかけないこと』の二つです。夫は私の生き方に理解があり、『夫婦平等』を貫いてきました。とても感謝しています」と語って下さった。

## (2) 取組みの特徴

原家の農業経営は、先進的である。①経営向上に向けて「青色申告会」を立ち上げた。②夫婦の役割分担を定め、「家族経営協定」を締結した。③商工会の「中小企業事業主退職金制度」に加入した。④「認定農業者」と「エコファーマー」に夫婦そろって申請し認定された。

また、原さん自身は、「食」（たべること）と「農」（つくること）が大好きで、人一倍勉強好きである。「食育ソムリエ」と「野菜ソムリエ」の資格を持っておられるが、その資格を取るために、東京に1カ月間もフードコンサルタントの集中講義を聞きに出かけたほどだ。

原さんの農業を中心にした「地域振興活動」は多岐にわたる。



小学校にて紙芝居による食農教育活動



紙芝居「ピーマンものがたり」

「銚田地域いきいき女性の会」会長として、紙芝居実行委員会を立ち上げ、この「食農教育」の教材として「ピーマン物語」を作った。紙芝居を通じて、子どもたちや親たちに「食の大切さ」や「食を作っている農業の大切さ」を伝えている。

「食農教育」とは、「食とは命を食べること、さらに、愛情を込めて作ると良いものが出来ることを伝え、豊かな食生活を創造する力やふるさとを愛する気持ちを育むこと」と熱く語られた。

また、「いばらき農村女性ネットワーク」の会長として、1,300人もを会員をリードされている。この会は、農山漁村における自主的グループがお互いに情報や技術の交換を行い、豊かな農村生活を築くために活動している。男女共同参画による経営・地域社会づくり、都市農村交流活動、地産地消の推進等もテーマになっている。最近では、「やさい食べよう350運動」を展開され、「1日3皿、5種類以上の野菜を350g以上食べて病気はゼロ」を目指している。

こうした多方面での活躍が評価されて、原さんは2008年農林水産大臣認定の「地産地消の仕事人」（全国48人）に認定され、2013年には内閣官房より「ふるさとづくり有識者会議」（13名）の委員を委嘱された。さらに、既述のように、本年6月には「男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰」を受賞された。こうして「ネットワーク」が広がって、原さんは外部に沢山の友人が出来、そうした友人は、前向きの人が多いので学ぶことが多いという。



首相官邸にて安倍総理と  
(2014年4月)

### (3) 今後の展開・夢

原さんに今後の事業への取組みと「夢」を伺った。「食と農が好きなので、農業を一生懸命にやっていきたいです。夢は、『グリーンツーリズム』への取組みです。料理が好きなので、地元の食材を使って、お客様に手作りの料理をお出しして喜んで頂きたいです。当地は、東京からも近いので、交流が進めば良いと思っています」と笑顔で語って下さった。

## 【事例5】

### 下妻の元気な「歩く宣伝レディ」

下妻食と農を考える女性の会（ウィママ）

代表 横島幸子さん

所在地：下妻市

#### (1) 事業概要と略歴

県西地区の憩いの場である「砂沼サンビーチ」の向かいに「ビアスパークしもつま」がある。1998年開業した当施設は、「ビア（地ビール）」、「スパ（温泉）」、「パーク



横島幸子さん

（公園）」をメインコンセプトとしており、敷地内に温泉施設、宿泊施設、公園のほか、農産物直売所や農産物加工場などを兼ね備えた、レクリエーション施設である。

この施設内にある農産物加工場を拠点に活動する「下妻食と農を考える女性の会」（1998年創設）の会長職を設立以来務めている女性リーダーが、横島幸子（よこしまさちこ）さん（70歳）である。

横島さんは、地元下妻市の出身。結婚前からソニーの系列の会社で働き、23年間、オーディオ製品の組立の仕事をしてきた。それと平行して、地域活動である「生活改善グループ」にも所属し、精力的に活動していた。そのため、社員の中で有給休暇消化率がダントツ1位となり、上司から「仕事と地域活動、どちらが大切なのだ」と迫られたという。しかし、横島さんは、たとえ給料を減らされてでも「どちらも大事です。どちらも両立したい」とその考え方を貫き、最終的には上司にも理解をしてもらったという。会社の理解があったからこそ、今の仕事をするということにも繋がっているようだ。

#### (2) 組織概要・取組み

「下妻食と農を考える会」は、1998年1月に発足。前身は、「地産地消」を掲げ、「食」に関わる「生活改善」をテーマに自主的に活動していた「生活改善グループ」（1975年設立）である。当時行っていた農産物加工事業に対して、地元JAや茨城県から、「ビアスパークしもつま」に設置する農産物加工場を活用してほしいと





「ピアスパークしもつま」の施設の一部

要請を受け、彼女自身も「このチャンスを逃してはならない」と感じ、「生活改善グループ」を母体として、梨農家、養豚農家、そして地元のお母さんたちが加わって結成された。横島さんたちは、地元の食材を加工し、付加価値をつけ販売しよう、同時に女性の就労の場を作ろうと一致団結し、準備に1年半をかけて、女性65名でスタートした。

当会の構成（事業内容）は、①梨加工部（ジャム、焼き肉のたれ、ドレッシング等；5名）、②食肉加工部（ベーコン、ハム、ウィンナー等；7名）、③みそ加工部（5名）、④新食材部（クッキー、アイスクリーム、ヨーグルト、米粉パン、米粉ピザ等；12名）の4部門である。各部が独立採算制を取っており、切磋琢磨し合いながら事業を進めている。現在の会員は29名で、7割は非農家の主婦が中心である。会員は1人5万円を出資して活動している。グループごとに仕事の時間も内容も違うが、時給500～600円を得てお小遣いにしており、洋服、旅行、孫へのお小遣い等に使われているようだ。グループごとに日帰り旅行や食事会等の親睦会も行っている。

「ピアスパークしもつま」の加工場で作られた商品は「ウィママ(We Mamの意)」という独自ブランドを構築している。会長の横島さんは、梨加工部に所属。平均72歳の女性4名で、地元特産品の梨を使ったジャム・ドレッシング・焼き肉のたれや、規格外の梨を使用した梨のプリザーブなどを製造、販売している。1番の人気商品は、「焼き肉のたれ」ということである。これらの商品は、「ピアスパークしもつま」だけでなく、「道の駅しもつま」（同一経営体）など、6か所で販売されている。

### (3) 取組みの特徴

当会の取組みの特徴は、次の通りである。

第1は、地元の農産物を加工・販売するという「農業6次産業化」の実践を行っていることである。地元

の農産物に付加価値を付けているだけでなく、選果場から規格外のものを仕入れることにより、従来までは捨てていたものを活用している。

第2は、地元の主婦やシニアクラスの女性に雇用の場を提供していることである。ここで働くのは地元シニア女性たちだが、横島さんを筆頭に、元気で張りのあるまぶしい笑顔の持ち主が多い。その秘密は、製造過程で手や頭を使いながら働くことで身体的にも良い刺激を受け、「健康増進」に、また出来上がった製品をお客様に提供する際、楽しく会話をすることで、笑顔が生まれるからだと言われる。こうして、地域のシニアクラスの女性の「生きがい」をも創出しているようだ。ただし、メンバーの高齢化に伴い、労働時間に体力的な制約が出ており、今後は、若い力をグループに投入することが課題になっているという。

第3は、シニアクラスの女性の経験や知恵が活かされていることである。長年、家事をこなしてきたシニア女性たちは、家事で大切な「段取り」を加工作業に活かしている。また、「もったいない」の心から、正規では売れない半端ものを上手に加工する技術も身につけている。さらに、日頃培っている「消費者の視点」も大切にし、地元のイベントなどでは「値段の付け方」等、「売り方」にも工夫を凝らしているという。



農産物加工施設「ウィママ」の前にて

### (4) 今後の展開・夢

横島さんにこれからの「夢」をお聞きした。「私は、仕事が好きで、お客様にお会いするのが楽しいです。月に2～3組ほど視察に来られますが、外の方からもパワーをいただいております。お金よりも、自分たちの技術を活かして、明るく楽しく仕事をしていくことが一番です」と切り出された。

横島さんたちの「若いシニア女性」の「生きがい」、「働きがい」は、「お客様に知っていただき、買っていただき、売上を上げる楽しみ」、「モノを作る喜び」、「人に教えてあげる喜び」、「お客様とお会いし、楽しくお

話する喜び」等であるという。そして様々な方とこの喜びを分かち合うことで「ネットワーク」が繋がり、さらに「交流」が深まっているようだ。そして、横島さんは、「同級生の中で、横島さんのような活躍をしている人がいるので、とても刺激になる」と言われたことがあるという。横島さんは、会のリーダーとしてだけでなく、地域のシニア女性の模範となっているようだ。また、この会のメンバーは、「家庭が円満」で「病院通い」も少ないとのことである。

横島さんは、「リーダーとして、様々な研修会や会合に出席して多忙です。私は『歩く宣伝マン』でもあり、私が動かないと、商品が動きません」と毎日アクティブに活躍されている。また趣味も多彩で、絵画鑑賞、読書、映画鑑賞、短歌、合唱クラブ、体操教室、フランドンス教室に通うなど、仕事も趣味も大変充実した生活を過ごされているようだ。



農産物直売所にて

### 【事例6】

#### 「浜のかあちゃんパワーで浜に笑顔と元気を」

大洗町漁業協同組合 女性部部长

「かあちゃんの店」代表

高橋早苗さん

所在地：大洗町

#### (1) 事業概要と略歴

茨城県屈指の観光地である大洗町。この町の漁港周辺は、東日本大震災で津波により被災した。現在は復旧し、町をあげて様々なイベントなどを実施して観光客も震災前まで回復してきた。この大洗町の魚市場に隣接した小さいけれどもインパクトのある新名所が「かあちゃんの店」である。地元漁師の元気な“かあちゃん”たちが、日々心を込めて作った大洗の地魚料理を振る舞ってくれる、大洗町漁業協同組合直営の食堂で

ある。

「かあちゃんの店」誕生の起源は、2004年に遡る。当時は漁協女性部の直販部に所属する有志12～13名が、手弁当を持って、干物やシラス干し、イ



高橋早苗さん

ワシの丸干し等を作り、市場の前で販売していた。魚の仕入れ代や包装代などを差し引くと手元に残るのは、1日働いても800～1000円程度だった。それでも、このメンバーは毎日頑張った。その後2～3年間、根気強く続けたおかげで、段々と評判になり、はるばる遠方から買いに来るお客さんなど固定客が付き、いつのまにか「行列のできる店」になったという。

その様子を見ていた大洗町漁業協同組合や大洗町役場などから「漁協女性部で食堂をやってみてはどうか」という勧めがあった。最初、とうちゃんたちは反対。しかし、かあちゃんたちの「やってみたい!」という気持ちが大きくなり、漁協の全体会議で事業化することが決まった。こうして、2010年4月に「漁師料理」を提供する店「かあちゃんの店」が誕生、開業した。

この「かあちゃんの店」に従事するのは漁協女性部45名のかあちゃんたちだ。平均年齢は65歳。リーダーの高橋早苗（たかはし さなえ）さん（73歳）は、元気で笑顔が眩しい浜のかあちゃんである。地元出身で、家は漁家。ご主人、息子夫婦、孫と、3世代が一緒に暮らす。最近、孫も漁業を継いでくれたと、目をほころばされた。

#### (2) 取組み概要

「かあちゃんの店」で働く浜のかあちゃんたちは、



「かあちゃんの店」全景



全員漁師の妻である。そのため、とうちゃんの船が漁港に入ると漁業の仕事にシフトする。「かあちゃんの店」から漁港までは、30秒の距離。そこで2時間程度作業をする。シラスの時期には、シラスの水揚げをし、目方を測り、仲買人に売って、車に積み込む。こうした作業を終えると、かあちゃんたちはまたお店の仕事に戻る。

「かあちゃんの店」の勤務体制は、3班体制の交代制で、1週間ごとに、①お店で調理、②お休み、③下ごしらえ・魚さばき、とシフトする。お店は月曜日が定休日だが、毎日午前10時から午後3時半までが営業時間である。1日平均250人、土日は500～600人が来店する。お客は、つくば、東京、千葉、埼玉、群馬、栃木など、遠方からやって来る。かあちゃんたちの時給は800円。平均1日5時間働くので、日給は4,000円程度になる。



「とうちゃん御膳」

メニューは、漁業者の家でしか食べられていなかった「漁師料理」を「かあちゃん御膳」(1,300円)、「とうちゃん御膳」(1,300円)、「おさしみ定食」(1,300円)、「生しらす丼定食」(900円)として提供している。「とうちゃん御膳」に付く煮魚は、あまりにも美味しいので「この煮魚は、どのくらい煮込んでいるの？ 一週間くらい？」とお客から聞かれるそうだ。地元の「漁師料理」の味付けは、素朴でおいしく、板前さんの料理とは「一味」違う味わいがある。また、この店のお刺身は、船を降りて料理人になった元漁師がさばいており、まさに「漁師の味」を堪能する事が出来る。

ところで、「かあちゃんの店」は、2011年3月11日の大震災で被災した。大洗町の海岸には、4mもの津波が押し寄せ、店内は目も当てられない程に破壊され、カウンターの上に冷蔵庫が乗り、床はヘドロで埋まったという。そんな状況を目の当たりにしても、かあちゃんたちは「泣いてはいられない。頑張らなきゃ。大洗の町を元気にしていくよ！かあちゃんの店から発信！」と、残った食器を何度もお湯で洗い、ヘドロを

流して復旧に取り組み、被災後81日後の6月1日には店を再開することが出来た。まだ当地区では一部「風評被害」も残るが、検査に検査を重ね、安全・安心な魚を提供しながら、かあちゃんパワーで大洗に元氣と賑わいをもたらしている。

### (3) 事業の特徴

「かあちゃんの店」の事業の特徴は、以下の通りである。

第1は、地元で水揚げされる魚介類を加工・販売し、さらに、「漁師料理」を提供する等、「6次産業化」や「地産地消」を推進していることである。

第2は、原材料として荷がまとまらない、サイズがそろわない、知名度が低い等の理由から市場で値がつかなかった低利用魚を使用したり、その日のセリで最高値で購入する等、「魚価の向上」に貢献していることである。これにより、漁家の実収が上がり、漁協も歩金上がる。

第3は、地域の雇用と所得の向上や、町の賑わいの創出、周辺商店への波及効果など、数多くの「地域振興効果」、「地域活性化効果」をもたらしていることだ。「かあちゃんの店」で働く女性部員は給料を受け取り、新たな漁家収入を得ている。漁協は「かあちゃんの店」の売上から全体の1割以上を得ている。さらに、「かあちゃんの店」の集客力のおかげで、周辺のお店にも人が入り繁盛し始めた。大洗町の観光名所ともなり、町全体の観光振興や復興にも貢献している。

第4は、「かあちゃんの店」は、60代・70代の女性部員が現役で働くことができ、「生きがいを創造」していることだ。

こうした活動内容や成果が認められて、本年3月、第19回全国青年・女性漁業者交流大会で「水産庁長官賞」を受賞。高橋早苗女性部長が、「浜のかあちゃんパワーで浜に笑顔と元気を一大洗町漁協「かあちゃんの店」絶賛営業中—」というタイトルで発表した。



厨房にて「浜のかあちゃん」たち

高橋さんは、「一生懸命働いてくれる女性部のメンバーのおかげであり、漁業協同組合のバックアップがあってこそ取れた賞です。大変感謝しています」と感想を述べられた。

#### (4) 今後の展開・夢

「かあちゃんの店」は、年々売上げも好調で、相応の利益をあげているため、漁協では現在、隣接地には「シラス加工工場」兼「かあちゃんの店別館」を建設中である。延べ床面積374㎡、総事業費1億円超、国の復興交付金事業として計画している。1階が干物加工場、2階が「かあちゃんの店別館」で、団体客にも対応出来るよう客席数も52と大幅に増加する見込みである。今年の11月が完成予定とのことで、漁業組合の方々も大変楽しみだと話されていた。

全国レベルで見ても、こうした店を浜のかあちゃんたちだけで運営している例はないようだ。「かあちゃんの店」には、県内外から、農業・漁業関係者が視察に訪れるという。高橋さんは、その際、「事業を始めるときに、大人数ではとてもまとまりきれない。まずは、やる気のある人3～5名で始めてみる。また勢いを付けてやっているとやる気が出てきますよ」と助言されるそうだ。

「魚は元気な生き物。それを扱う自分自身にも元気がないと！」と高橋さんは話された。生き物を扱うということは、命を扱うこと。海の恵みを、一番美味しい食べ方で調理して提供することは、ここで働くシニア女性の生きがいに繋がっている。また、「どんなにつらい事があっても、お客さんから『美味しかった』と言われると、本当にうれしい」とはち切れんばかりの笑顔で語ってくれた。



建設中の「かあちゃんの店別館」

#### 【事例7】

#### お母さんたちによる「6次産業化」の「三冠王」

夢ひたちファームなか里

代表 梶山明子さん

所在地：日立市中里地区

#### (1) 事業概要と略歴

常磐高速道の日立中央ICを降り、山道を越えながら、日立市西部地区へ車で20分。国道349号と合流し、さらに北に少し進むと、国道沿いに「夢ひたちファームな



梶山明子さん

か里」の看板が見える。この中里地区（旧中里村）は、南北に流れる清流・里川沿いに、日本の原風景というべき静かな里山の風景が広がった、500戸の山間地域である。この地区を拠点に過疎化や農業の低迷を克服しようと様々な活動を展開しているのが、「夢ひたちファームなか里」である。現在女性6名、平均年齢60歳の熱いグループである。

代表の梶山明子（かじやまあきこ）さんは、山梨県の農家の出身。結婚を機にご主人の実家がある中里地区にいられた。地元の人からから見れば彼女は「よそもの」。3人の男の子の母親だ。子供たちを思い、様々な食材を地区外に買いに行く梶山さんに、義理の両親は「うちで野菜を育てているだろう」と、買い物一つをとっても田舎暮らしは窮屈で大変だったという。しかし、自分の意志を貫き、意見を伝えながら地域社会に溶け込んできた。その強い想いが今日の梶山さんの



本部兼「農家民宿」の古民家



活動に繋がっているようだ。

活動の始まりは、梶山さんを中心に当地区にママさんバレー部を作ったことであった。そのメンバーでお茶を飲み、漬物作りを始めた。若いお母さん7~8人でJAの敷地を借りて「農産物直売所」も始めた。1990年に、JAの「直売所」が出来て、このメンバーはそこでパートとして働きながら、加工品作りも行った。その後、4つのグループで「農産品加工」を進めみそ作りや、地元の果樹園で採れたリンゴとブドウからジャムを作ったり、梅干しを作ったりと、お土産作りをして販売した。さらに、最近は、「夢ひたちファームなか里」のスタッフがピクルスの製造を始め、「中里農産物加工研究会」の会員として活動している。この他、1997年から、地元の耕作放棄地を利用して、市内の幼児を対象にイモ掘りなどの「農業体験」を企画したり、2003年からは「農業体験」を中心に都市住民との交流を始めている。このように、「夢ひたちファームなか里」の事業は多岐にわたる。

## (2) 取組み概要

「夢ひたちファームなか里」が展開する事業は多岐にわたり、「6次産業化」事業の「3冠王」である。すなわち、「加工場」「販売所」「農家民宿」等の「6次産業化」事業を少人数ながら広く展開している。

第1は、「グリーンツーリズム農業体験」である。米作りをはじめ、そば、さつまいも、じゃがいも、野菜等、多くの農作業体験ができ、ピザ焼き等も楽しみながら人との触れ合いを深めることが出来る。

第2は、「農家民宿」である。当会の本部でもある古民家で、囲炉裏を囲んで四季折々の地元の山菜や野菜や地魚の料理を楽しむことが出来る。

第3は、地域伝統古行事や工芸品づくりの体験、都市住民の二地域居住・定住促進、地産地消、食育推進、食品加工（ピクルスなど）開発など幅広い事業を展開している。

このように様々な取組みが認められ、2008年度には農林水産省の「立ち上がる農山漁村」の選定事例に選ばれた。また、梶山さん自身は、「農林漁家民宿おかあさん100選」に選ばれた。「農林漁家民宿おかあさん100選」とは、(財)都市農山漁村交流活性化機構が全国の農林漁家民宿の管理を担っている女性実践者の中から、地域における取組みでオピニオンリーダーとして活動している人を全国から100名選定したもので、茨城県では梶山さんが唯一選ばれた。

しかし、東日本大震災による「風評被害」で、農家民宿はキャンセルが相次いだ。この場所を大変気に入る、「いつかここに住みたい」と話していた東京に住



JAの農産物加工場にて

む常連客も来なくなってしまう。現在は、「開店休業状態」にあるという。そんな状況下で、会員も減少し、管理費が維持できるかどうか大変心配していたという。活動は停滞し、ついに梶山さんは疲労困憊し体調を崩してしまう。そんな状況を見たご主人は、「お母さん1人で全てを抱え込まないほうがいい」と助言。その言葉にはっとし、酷使してきた身体を休ませる期間を取ったという。現在は回復し、元気な笑顔で精力的に活動を続けておられる。

## (3) 取組みの特徴

「夢ひたちファームなか里」および代表の梶山さんの取組みの特徴は、次の通りである。

第1は、ネットワーク作りに優れていることである。梶山さんは、家族に「夜に女が出歩くなんて！」と言われながらも、若いころからママさんバレーチームを作って、地域の女性ネットワークを作り上げていた。影響力のある人を仲間に入れることで、理解を広げていくことが得策だと考えたという。また、義父から引き継いだ水道の検針の仕事で、地域に顔なじみを作っていた。さらに、会の活動を通して、行政や農協などとも理解を深め合った。そうした実績が認められて、梶山さんは、1994年から2006年までJAの正職員に登用されている。また、「グリーンツーリズム・インストラクター」の資格を取ったり、会議のために東京に出向き、全国にアドバイスしてもらえる友人も数多く出来た。梶山さんは、「人との出会いが何よりの宝です。行政や大学や同じ考え方を持つ多くの人達の手助けとつながりがあって、私たちの活動は大きくなり、前進しております」と話された。

第2は、梶山さんは、「よそのもの」として、また「女性」として新鮮な「気づき」を大切にしながら、農村特有の「閉鎖的」で「古い」体質への「反発のエネルギー」をバネにしながら、地域社会に積極的に溶け込んでいったことである。

第3は、大学との連携を進めていることである。茨城キリスト教大学とは、マコモの商品化等を共同研究している。月に1回、学生と商品開発の打合せを行う。東洋大学図書館館長・教授の青木辰司先生はわが国の「グリーンツーリズム」の実践研究の第一人者だが、当地で「フェアツーリズム」の全国大会を開催すべく検討をしている。

#### (4) 今後の展開・夢

梶山さんのこれからの夢は、極めて具体化したものになっている。

第1は、「愛菜ピクルス」づくりの事業を軌道に乗せることである。これは地元のきゅうり、大根、にんじん、パプリカ、たけのこなどを、白梅酢やらっきょう酢で漬け込んだオリジナルなものだが、国民宿舎鶴の岬の元料理長の木村義行氏にレシピの作成等を指導をしていただいたものである。「愛菜ピクルス」は、マッチング会等で注目されており、JR東日本の「のもの」担当からも引き合いがあったという。



「愛菜ピクルス」

第2は、地域内に分散している「耕作放棄地」の管理や活用を進めることである。これには援軍も現れた。「夢ひたちファームなか里」の会員で日立市内に住む男性が、定年退職後に農業を志向し、梶山さんの畑を借りてイチゴ作りを始めた。それがきっかけとなり従来農業をしていなかった梶山さんのご主人も一緒に農業に従事するようになり、会員としての月2回の活動日以外に毎週1回、ボランティアで「耕作放棄地」の管理作業をすることになったという。

第3は、この地域の景色と地の食材を楽しめる「農家レストラン」を開くことだ。「6次産業化」で、加工場・販売所・レストランを全て実践している人はいない。その先駆けになりたいと意気込む梶山さんの目には、希望が満ち溢れていた。そして、「70歳までは現役を続けたい」と熱く語られた。

#### 【事例8】

#### 里山を守り続ける「女性伝道師」

認定NPO法人 宍塚の自然と歴史の会

代表 及川ひろみさん

所在地：土浦市

#### (1) 環境や略歴

土浦市とつくば市を結ぶ県道24号（土浦学園線）沿いの中間地点に大きな森が広がっている。宍塚の里山だ。ここ土浦市宍塚には、宍塚大池を囲むように、雑木林、草



及川ひろみさん

原、田んぼ、畑、小川、湿地などがあり、東京から筑波山の麓までで最も広い、約100haの豊かな「里山」が広がっている。また、上高津貝塚など国指定の史跡や文化財が点在し、「里山」の暮らしの知恵が今も受け継がれている場所だ。また、日本ユネスコ協会連盟「ユネスコ未来遺産」や、農林水産省「日本のため池100選」に選ばれている。この関東平野最大の「里山」を26年間守り続けているのが、「認定NPO法人 宍塚の自然と歴史の会」（会員数470名）である。

この会の代表を長年勤めているのが、及川ひろみ（おいかわひろみ）さんである。及川さんは、東京都生まれの神奈川県育ち。若いころから自然に親しみ、その頃から培った自然への慈しみの心や、自然を総合的にとらえる「生態系」や「生物多様性」への関心は、現在の及川さんの活動の原点になっているという。大学では、自然科学と教育を専攻し、1年半理科の教員も経験している。

及川さんがつくば市に来られたのは37年前、ご主人の転勤に伴うものであった。そして、2人のお子さんを当地で育てられた。

及川さんは、「初めて宍塚大池を訪れた時の感動は忘れられない」と話す。「久しぶりに良いところに出会った。かつては当たり前だったものが、多くの場所で失われていたことから、この里山を未来に伝えていきたいと思った」と語る。

及川さんは、その後の環境保全活動の取組みを以下のように展開された。1987年頃からグループ活動、「土曜観察会」を立上げ、その後、「日曜観察会」（1989年）





宍塚大池にて

に改めて男性会員も募集し、「学習会」も始めた。地元を良く知る知識人の助言に助けられ、「宍塚の自然と歴史の会」を立ち上げた。勉強会は30人程度でつくば、土浦の人を中心に夜、官舎の空き室を利用して始めたという。

この会の活動の柱は、①「生物多様性」を維持、②地元の人が納得できる宍塚の価値を生かす場所の使い方を考える、の2つだった。宍塚は、筑波研究学園都市建設計画の中で、50年前から開発計画があり、地元の人々の期待も大きかった。それを大事にしながら、宍塚の価値をどう生かしたらいいか、この地域の魅力をいかに見いだしたらいいか、地元の人にとってどのように納得してもらえるか等を考えた。「皆で考え、熟成させ、発酵させるプロセスが大事です。そして、丁寧に物事を進めていると、段々とネットワークが広がり、それによって考え方も深まり、さらに色んな人が集まってくるようになるのです」とリーダーとして、会を長く続ける「秘訣」を教えて下さった。

1997年に及川さんが当会の2代目の会長に就任した。専門家だけでなく、一般市民もついてくる仕掛けを考え、そのために目玉になる人を探した。環境を哲学的に考える「環境倫理学」の加藤尚武(ひさたけ)先生に出会うことも出来た。

## (2) 会の概要と活動内容

当会は、市街地近郊における里山保全を行うボランティア団体で、1989年、任意団体として発足、2003年特定非営利活動法人の認証取得、2010年認定特定非営利活動法人の認定を受けている。会員総数は469名(内正会員119名)、会費(普通会員年1500円、正会員年2000円、賛助会員)で運営している。なお、会員は、小・中・高校生、大学生、社会人、主婦と幅広く、男女半々で、地元の人々は1割程度と少なく、研究者は1割弱程度である。

当会の活動内容は、多岐にわたる。①観察会、②里

山作業ボランティア(里山さわやか隊)、③田んぼ塾、田んぼの学校、④農園、⑤宍塚米オーナー制(谷津田耕作農家支援・産直)、⑥歴史部会(里山の暮らしの聞き書き、資料収集、「聞き書き 里山の暮らし—土浦市宍塚」(県中学校推薦図書)等の出版)、⑦池の保全(外来魚駆除、オニバス保存、多様な生物生息環境の保全活動)、⑧環境教育部会、⑨里山子ども探偵団、⑩つながり・交流、⑪調査、⑫伝統文化の継承、⑬企業(富士通、LIXIL等)との連携、大学、研究所等多方面との連携活動、⑭広報、出版等、である。

なお、当地区の100haの里山は、2割は公有地、8割が私有地であるが、当会でも、2年前に、地元から1.27haの山林を購入し所有している。森林、草原、池、湿地、谷津田、小川等、環境要素ごとに「生物多様性」を目指した活動をすべく、ある林は、植物豊かな森づくり、蝶の生息に適した環境作り等、大学、研究所などの先生の指導を受けながら、会全体で活動内容を決めている。ありのままの自然の姿と人工をバランスさせて、「生物多様性」を目指した活動を行っている。

これらの活動を行う中、「環境教育」が里山の未来を考える上で重要課題であると考え、現在は「環境教育」も里山保全の目的の第3の柱になっている。その一環として、地元の小学生向けにイラスト入りの「宍塚大池のお知らせ」という案内書を毎月1万5千部配布している。

さらに、「里山サミット」、「オニバスサミット」など、全国的な会合を土浦で開催し、全国的にも先行した会となっている。

こうした活動実績が評価されて、本年5月、内閣官房及び農林水産省の「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」に、全国251地区の応募の中から23地区の1地区として選定された。また、国外からも評価され、JICAを通じて7年前からアフリカ、中南米、中国、韓国などの主に環境省や国立公園関係部署の役人が視察、研修に訪れるようになった。



当会の事務所

### (3) 取組みの特徴

当会ならびに及川さんの取組みの特徴は、以下の通りである。

第1は、「よそもの」として、地元との関係を大事にしながらかつ活動していることである。活動当初は、地域の「閉鎖性」に驚いたが、宍塚を愛する心を強く持ち、保全活動、ゴミ拾い、各種調査などの活動に始まり、公民館、文化祭での展示、会報の発行、サミットの開催など多種多様な活動を20年に渡り地道に積み重ねてきたことで、地元の人々も少しずつ理解を深めてくれているという。

第2は、つくばの地の利を最大限活かし、「産官学連携」を行っていることである。「この地はたまたま、知的な人材の宝庫であるつくば市に近い場所でした。レベルの高い講師を呼ぶことが出来たり、おやごさんたちの子どもたちに対する教育意識も強かったと思います。その結果、つくばという地の利の恩恵は受けていると思います」と語られた。また、筑波大学の授業やインターンシップの受け入れ、茨城大学農学部との研究プロジェクトの推進等も行っている。

### (4) 今後の夢など

及川さんは、「日頃忙しくて見失いがちな“大切なもの”を、宍塚の里山は教えてくれる」という。「地元の方、里山にやって来る大勢の人が未来を考える源になっています。引き継いでいくべきものは何なのか、会のメンバーや地元の方々と一緒に考えながら活動していきたいです」と語り、100年後の「宍塚の里山」に思いを馳せながら、「人間・自然の持っている素晴らしいものを受け継いでゆきたい。里山で見る子ども達、若者達の目の輝きこそが、自然の持つ大きな力を確実に捉えている証であり、日本の未来を保証するものだと考えています」と強い意志を持って語られた。



### 【事例9】

#### 週一カフェの「おもてなし」で町が変わる！

大子町 サークル結、「一日カフェゆらぎ」

代表 田中さよ子さん

所在地：大子町

#### (1) 取組み経緯

茨城県北に広がる奥久慈。その中心地である観光地・大子町は、清流・久慈川が流れ、青々とした山に囲まれた人口約2万人の町だ。JR水郡線の常陸大子駅を商店街の



田中さよ子さん

方に向かうと右手に文化福祉施設「まいん」が見え、その向かい側に趣のある古民家がある。そこが、土曜日とイベントがある日のみ開店する「一日カフェゆらぎ」だ。

「一日カフェゆらぎ」は、大子に訪れる観光客の一声から始まった。「駅前でお茶を飲める場所はないか」。確かに大子駅周辺で気軽にコーヒーを飲みながらくつろぐ場所はなかった。そこで目をつけたのが、メンバーの1人である小祝睦子さんが所有する築100年以上に経つ趣のある古民家。この場所を、大子に訪れた観光客をもてなす空間としてオープンした。

「一日カフェゆらぎ」を運営するのは、「サークル結」という大子町商工会女性部の有志で、駅前通り商店街のおかみさんたち6人で結成した「仲良しクラブ」で



「一日カフェゆらぎ」



ある。6人は、それぞれ家業を持ちながら、カフェを運営している。代表の田中さよ子（たなかさよこ）さんは電気工事店、斉藤恵美子さんは衣料品店、太田良子さんはこんにゃく店、小祝睦子さんは化粧品店、山田良子さんは文房具店、桜山美保子さんは病院を営んでいる。開店日には、リーダーである田中さんを筆頭に、時間をずらしながら当番制をとっている。

また、彼女たちは、日々の忙しい合間を縫って、平成23年度の「茨城県商店街活性化コンペ事業」に参加し、見事に最優秀賞を受賞し、サークル活動に勢いをつけた。

## (2) 取組み概要

カフェの客は、土曜日は15人程度。観光客や病院帰りのおじいちゃんなど様々で、日立市、高萩市などから車で若いカップルも来るそうだ。じいちゃん・ばあちゃんが大子の風景を見せたいと、孫と一緒に来ることもある。店頭に並んだ大子土産を買いに立ち寄る人は沢山いる。大子のイベントは、よさこいソーラン、奥久慈まつり、ひなまつり、花火大会等がある。よさこいイベントの時期に、毎年、必ずカフェに来てくれるフランス人のおじいちゃんがいる。カフェの奥にある日本庭園を楽しみにしているらしい。また、「大子が元気だから」と県外からカフェに視察に来る人も多い。

カフェの売上高は、2010年218万円（土曜日+イベント開催日）、2011年210万円（震災で減収）、2012年415万円（総菜販売開始）、2013年467万円と伸びてきた。

ところが、2011年3月11日の大震災で大きな変化が発生した。水郡線は水戸から大子止まりとなり、半年間、誰も来ない日々が続き、売上も落ち込んだ。しかし、地元商店の仕入れ商品を増やししながら、元気を取り戻し、同時に売上も回復させた。

最近、開店日には、店頭で大子の特産品や、商店街に店舗を構える飲食店の一口お惣菜が並ぶ。一番の



田中さん(左)と斉藤恵美子さん(右)

売れ筋は、地元の特産のリンゴをふんだんに使用した「アップルパイ」(700円)だ。ロールケーキ・「ゆらぎロール」は、しゃもの卵を使い、大子製菓に作ってもらったオリジナル商品である。その他、リンゴジャム、りんご、草もち等が並ぶ。また、友人がつくった「手作りブローチ」「バッチ」「かごのバッグ」なども展示販売している。2012年から、地元の店から総菜や弁当を仕入れて販売し始めたら売上が倍増。近所のお年寄りが病院の帰りに買いに来るといふ。いなり5個入りなど、高齢者世代にやさしい小分けにした総菜が、お昼までには売り切れるという。仕入れ先は、通常8~10店、イベント開催時は20店程度である。「私たちは、地元の美味しいものをたくさん知っています。その味を多くの人に知っていただきたいと思っています」と田中さんは話された。

この他、1年を通じて、折り紙教室も開催している。最近では、非営業日に、会議室代わりにカフェスペースを10~15名程度で借りたいと言ったニーズも出ており、珈琲とケーキ、弁当を注文してくれるようなこともある。

事業収支は、月家賃、ガス水道代を払うと、赤字が続いていたが、最近、剰余金がでるようになったという。メンバーで、イベントの後で豪華な食事をしたり誕生会を開いて楽しいひと時を過ごし、活動のパワーを充電していると話された。

## (3) 取組みの特徴

サークル結・「一日カフェゆらぎ」の取組みの特徴は、次の通りである。

第1は、町を、商店街を、コミュニティを元気づける「コミュニティカフェ」であることだ。「一日カフェゆらぎ」のだいご味は、なんとといっても、地元のおかみさんたちとの「おしゃべり」だ。これが多くのリピーターを生んでいる。美味しいコーヒーと大子特産品リンゴのお菓子を食べながら、大子の魅力を聞き、目利きのおかみたちが選んだお土産まで買える。このような贅沢な時間・空間を、このカフェは提供してくれる。

また、東日本大震災直後、大子には人っ子ひとりいない状況になった。そんな時、地元の方がここに来て「怖かったねえ」と話すことで、心が落ち着いたという。カフェは地域の方々の「心のよりどころ」「溜まり場」にもなっている。

さらに、田中さんたちは、ここを自主的に町の「観光案内所」としても機能させ、自ら大子町の魅力や観光情報を伝えている。

第2は、1週間にたった1日だけ営業するカフェであるが、この通りに、この町に「変化」を起こしてい

ることである。最近、大子の市街地には、おしゃれな、新しい店も増え始めた。大子特産品の漆の工芸品を扱う「麗潤館(れいじゆんかん)」や、古民家を利用した「daigo Café」(店主・笠井英雄氏)だ。大子の町中を訪れる観光客は、



「daigo Café」(店主・笠井英雄氏)

「八溝塗工房 器而庵(きじあん)」をスタートし、大正6年に建てられた銀行を利用した「街かど美術館」を見学し、「daigo Café」で昼食を取り、「麗潤館」で漆器と建物を楽しみ、最後に「一日カフェゆらぎ」で大子の特産品をお土産に買うという、コンパクトな回遊コースを楽しんでいるという。また、「大子が元気だから」と県外からの視察も増えてきたようだ。こうして、口コミ、facebookなどのSNS、観光協会のパンフレットなどで、大子の観光にもさらに活気が出てきた。さらに、「一日カフェゆらぎ」は、町に住む他の女性たちに刺激も与えているようだ。町のイベントのときに、「私たちもやってみようよ」といった新たなグループも現れているという。今年のひなまつりイベントには、大子で活動するお茶教室の女性たちが、抹茶を出してお客様をもてなす場面もあったそうだ。2012年には、グループの一員である桜山さんが息子さんとともに上小川地区にある古民家を活用して古民家カフェ「宮田邸」をオープンさせるなど、活動が広がっている。

また、今年から大子の町にも個性あふれる「地域おこし協力隊」のメンバーが5人も加わった。隊員の一人は占いを特技としており、毎月第二・第四土曜日は「一日カフェゆらぎ」で、第一・第三・第五土曜日は「daigo Café」で占い喫茶を開催している。占いの評判が人を呼び、町外からも多くの人を訪れ、占いの待ち時間を活用して町歩きをする人が増えるなど、早速町の活性化につながっている。

田中さんは、地域の方々や、地元の高校、大学、企業、また協力隊などの「よそ者」と連携を図りながら、「今後も大子の魅力を発信していきたい」と語ってくれた。これからの大子の町の変化が楽しみである。

## 【事例10】

### 「子育て上手 常陸太田」の「結び役」

常陸太田市 Cafe結+ 1

代表 塩原慶子さん

所在地：常陸太田市

#### (1) 取組み経緯と略歴



塩原慶子さん

常陸太田市鯨が丘商店街の一角に、空き店舗を改装したオシャレな「コミュニティカフェ」がある。「Cafe 結+ 1」だ。店内は優しい木目調で統一され、入り口からの日が暖かく店内を照らしている。美味しいコーヒーを飲みながら、代表の塩原慶子(しおばらけいこ)さん(58歳)にお話を伺った。

塩原さんは、日立市出身。短大卒業後、家業を手伝い、1985年に結婚し、当地へ来られた。その時に感じたことは、「結婚して遠くから来た女性は、気軽に話せる友人がいない」ということだった。どこのスーパーが安いか、どこの病院が良いかなど、地域の生活情報を得るにもある種の苦労が必要であった。そのような経験から「女性が集まる開かれた場所」があったら、と考え始めた。



「Cafe 結+ 1」全景



自身の子育ても一段落し、まちづくりの活動に関わるようになっていたころ、鯨が丘商店会が主催する視察旅行で、黒磯市の「CAFÉ SHOZO (カフェショウゾウ)」を訪れる機会を得た。その瞬間「欲しかったのはこういう場所だ」と思い、仲間と相談の末、念願であったコミュニティカフェ開店を決意。商店会を通して借りることができた元筆筒屋さん（「空き店舗」）を改装して「Cafe結+ 1」が誕生した。現在スタッフは4名でシフトを組んでいる。

## (2) 取組み概要

「Cafe結+ 1」は、最初8人の女性たちの出会いから始まった。男女共同参画、生涯学習活動などの社会的な活動を通して知り合った知的な女性たちである。周りからは「もめるでしょ」と言われたが、それぞれが長年の活動の結果、人との距離の取り方や、自分の責任で、自分の出来る範囲を決め関わってきたので、もめることは無かった。しかし、「女性」という色眼鏡で見られていたことを感じるエピソードではあった。

	2008	2009	2010	2011	2012
初めてのクラシック	○	○			
Nobody's Perfect		○	○	○	○
親子でクッキング	○				
ハンドメイド講座	○				
絵本であそぼ	○	○	○		
親子でストレッチ	○	○	○	○	○
NPフォローアップ			○	○	
SNS講座			○	○	
FTF交流会			○		
はぐみの				○	○
子育て応援都市トークカフェ					○
わくわくさんとあそぼ♪					○
カメラ女子教室					○

塩原さんたちは、「女性のネットワーク」や「子育て支援」という観点から、上表のように、様々な事業を展開している。その際、雑談から生まれる自由な発想や、主婦・生活者の視点は大事にしているようだ。

鯨が丘商店街のテーマである「スロータウン鯨が丘—和暦の時が流れる街—」<sup>1</sup>に対しても同じ思いで活動しており、「スローフード」や「スローライフ」という概念を尊重している。「地産地消」、地域の子育て中の女性たちが地元の食材を素敵な食器で提供し、美味しくいただく。塩原さんは、「結婚、子育てが原因で仕事を辞めてしまい、能力を活かしてきていない『女性たちの力』」を応援していきたいと思っています」

と話された。子育て中の働き方については、今年度常陸太田市の事業を通して交流の出来たつくば市に本社を置く(有)モーハウス（事例1）をモデルにしているという。「働くママの姿を子どもに見せることも、良い教育になると思います」と語られた。

## (3) 取組みの特徴

取組みの特徴は、地域の「コミュニティカフェ」として機能してきた「Cafe結+ 1」が、地域に変化をもたらした点である。

第1は、鯨が丘商店街を歩く客層が変化してきたことだ。以前は高齢者が多かったが、最近では若い人たちもよく訪れるという。

第2は、講座受講者同士が友達になったり、お母さん同士をつなぐためのイベントにお母さんたちを巻き込みながら企画しているので、新しいお母さんグループが誕生している点だ。地域のつながりが崩れてきていると言われるが、「Cafe結+ 1」をハブとして、地域の中に新しい繋がりを生んでいるようだ。

第3は、行政と協働で常陸太田市の子育て支援策として、「子育て上手 常陸太田」推進隊としても活動していることである。塩原さんは、「常陸太田市は、情報共有にはとても適した大きさの町であると思います。顔が見えるネットワークづくりは何よりも大切です」と話された。

## (4) 今後の展開・夢

従来の6年間の活動実績を踏まえて、本年4月から「特定非営利活動法人 結（NPO結）」として法人化した。子育て支援グループや男性メンバーも加えて、助成金の受け皿や活動のプラットフォームとして利用するためにNPO法人化を行ったものである。メンバーは、男性11名、女性7名、平均年齢50代半ば。今後



「Cafe結+ 1」の店内

<sup>1</sup> 鯨が丘商店街の活性化への取組みについては、「筑波銀行 調査情報」2010年6月号NO.27「茨城県内の元気な商店街とその成功要因—つくば市北条商店街と常陸太田市鯨が丘商店街の事例—」参照のこと。

は一層、地域の子育て支援に励むと同時に、歴史的町並みの保存、アーティストインレジデンス事業、子育て支援、WEBや地域情報の発信などの事業も行っていきたいと考えている。

最後に、塩原さんは、「地域活性化と謳って、イベント開催のみに留まる場合が多いです。私は、本来の活性化とは、地域住民が自ら考え行動し、暮らしを楽しめるようになることだと思います」と行政の課題にも言及され、その上で、「全ての人が、明るく健やかに自分を活かして暮らせる家庭や社会をすることで、必然的に地域は明るくなっていくのではないのでしょうか。地域に住む方々のクオリティオブライフ(生活の質)をあげるために、私たちの活動がその一助になれば良いと思っています」と、地域の未来を見据えたまなざしで語られた。

### 【事例11】

## 「よそもの」&「わかもの」&「女性」による地域の活性化

常陸太田市地域おこし協力隊 第1期生  
長島由佳氏（現・常陸太田市観光物産協会）  
所在地：常陸太田市里美地区

### (1) 略歴と「地域おこし協力隊」

茨城県北部地区に位置する常陸太田市は、2004年に旧常陸太田市、旧金砂郷町、旧水府村、旧里美村、が合併して誕生した。この里美地区は、山あいのどかな里山地



長島由佳さん

域である。ここに3年前に、「地域おこし協力隊」の隊員として着任し、3年間の任期を終えた後も、ここに住み着いて「地域おこし」に燃えた若い女性がいる。

「地域おこし協力隊」とは、総務省の事業で、都市住民を地域社会の新たな担い手として受入れ、地域力の維持・強化を図る事業である。全国318の地域で約978名（平成25年度）の隊員が活躍しているが、茨城県では2011年4月に常陸太田市が導入したのが最初であり、その後、笠間市や大子町でも導入している。常陸太田市では、昨年度までに任期を終えた4名の隊員、

2013年度から新たに始まったアーティスト・イン・レジデンスの隊員3名、今年度新たに着任した隊員を含め、これまでに11名が里美地区、金砂郷地区、水府地区で活動してきている。

2011年4月から活動していた里美地区の3名、金砂郷地区の2名は全員清泉女子大学地球市民学科の卒業生である。「地域おこし協力隊」・「Relier(ルリエ)」[フランス語で「つなぐ、結ぶ」の意味]というチーム名で活動した。大学が長年里美地区(旧里美村)でフィールドワークの授業を行ってきた繋がりから制度の導入に繋がっており、また、「地域おこし協力隊」は男性が割合多く、20代女性だけの隊員を導入しているというケースは大変珍しい。2013年からは新たに水府地区に男性隊員も加わり、活動の幅を広げた。

長島由佳（ながしまゆか）さんは、神奈川県生まれの28歳。清泉女子大（東京都品川区）地球市民学科を卒業して、国際的な仕事をしたいと大手旅行会社に就職したが、国内の現場を知るのが先と、心機一転、2011年に「地域おこし協力隊」に応募し、この里美地区に飛び込んだ。

### (2) 取組み概要

長島さんの「地域おこし協力隊」隊員としてのテーマは、「食」と「教育プログラム」作成と「若者のネットワーク構築」であった。

第1は、地元のお母さんたちとの「食」に係わる活動である。「私の目線は、①土地のものを旬に食べるということの価値を見直す、②お母さんたちの「手作り」の料理＝「家庭料理」をテーマにする（味付けは家庭ごとに違うが食文化は共通）、③里美の豊富な「食材」を再発見し、活かす（植物の南限と北限の境界に位置）というものでした。「地域にとってみれば当たり前のもものも、私には目新しく映りましたし、季節と共に生きる里美の人の生活がとても豊かに思えま



「里美御膳」



した。様々な事業を通して『食べる』、『買う』、『出会う』の3つのシステムを地域内でうまく回して里美と『地縁』のある人を増やしていく仕組みをつくることをテーマに活動を進めました」と話す。

その取組みのステップとして、地元につながる料理レシピの調査から始めた。地域のお母さんたちにとってみれば「家庭料理」は「当たり前」のもの。普段の作っている料理を聴きだし、実際に作りながら教えてもらった。ゴーヤやキュウリの佃煮、漬物など保存食の技術、食材やレシピに詰まった文化・知恵・思い等を学んだ。「野菜食材はスーパーで買うものではなく、土地のものを旬に食す」という古いようで新しい“最先端の生活”に長島さんは感動したという。四季折々にエネルギーのある食材がある。秋には、食材が豊かになり、冬には、保存食が豊かになる。

次に、お母さんと一緒に里美地区の家庭料理をひとつの御膳に集約した「里美御膳」の試作品をつくり、試食会を開いて、清泉女子大の先生や学生など、地域外の人に評価してもらい、意見をもらった。お母さんたちにとって始めは「こんなもの、教えるほど、食べてもらうほどのものではないよ」という認識だった料理も、徐々にその価値を認識し、外部の人の反応や交流を糧に「小さな成功体験」を積み上げていった。こうした「食」に係わる集大成が、「里美御膳（期間限定レストラン）」であり、地元の古民家「荒蒔邸<sup>あらかまきてい</sup>」において、これまでに3回ほど開催している。長島さんは、お母さんたちの手作りの料理に「自信や誇り」を持ってもらうことに尽力した。このイベントはこれまでに、秋の紅葉が楽しめる11月、保存食が美味しい2月、田んぼ仕事が一段落した6月に開催。これも地域に根差した日取りだ。

第2は、「教育プログラム」の構築である。「地域にあるものには、昔の人たちの知恵がたくさん詰まっています。家屋一つとっても、ふすまを外せば宴会が出



「里美御膳（期間）限定レストラン」にて

来る造り等、文化が詰まっています。そうした地域のことを学ぶと『自分の中の時間軸』が変わります。都会の生活では得ることが出来ない、何世代にも渡るゆったりとした時間の流れを感じ人間的に豊かになれると思います」と語られた。「時間軸」に関してはプログラム一例だが、これから社会人になる人向けに、そのような地域の人の生き様や暮らしぶりを通して自分の中の価値観と向き合う「教育プログラム」を作ることがテーマであった。

プログラム実施の一例として、長島さん自身が中央大学で講義をし、その後3日間20名でフィールドワークを行ったものがある。地元の人から話を聞く機会を作り、夜は参加者同士のシェアの時間を取り、お互いに刺激を受け合う。プログラムの最後には、地元の方も招いて発表会を行った。そこでは、地域の人も自分の地域のことを説明する中で「気付き」があったという。また、障子張りの上手な建具屋さんなど、何かの技術に長けた人たちに参加してもらい、「達人に聞く」という企画も効果があった。地元の方々からは、「若い世代との交流・触れ合いが嬉しい、自分の仕事に誇りを持つことが出来た」など嬉しい声が多数寄せられたという。学生の参加者も、「3日間で自分の中の価値観が変わった」という人もいたという。こうした企画から、「地域が生きるための学びの場にふさわしいことを知ってほしい」と長島さんは語る。このプログラムは今後企業人の研修等にも波及させていきたい考えのようだ。

第3は、「若者のネットワーク構築」だ。地域を担っていく次世代の若者が、様々な活動を通して自らの地域との関わりを増やしていったり、積極的に活動していくことができるような仕組み作りに取り組んだ。里美の美しい水をPRし、豊かな森や水を守っていく活動を行う「里美の水プロジェクト」を地域の若者と立ち上げ、里美の水に併せてブレンドした珈琲豆を使用した「里美珈琲」の商品化、販売を通じて自立的な取り組みを行った。地域内の「道の駅」等で販売、好評を博し、今期で3年目となる。また、毎月第二日曜日には地域内の酒蔵や「道の駅」、旅館などの事業主が自らのフィールドでお客をおもてなしする「里美の日」を実施したり、その中で里美地区の情報発信基地としての役割を担う「コミュニティ・カフェ」を地域の若いお母さんと運営するというも行った。すべては、活動を通して地域内外の人がつながりを生み出し、地域が次の世代へスムーズに継承されていくことを目指した活動だった。

長島さんは、この3年間の取組みについて、「地域の可能性は無限大です。里美のコミュニティ、人間関



係は、全部がつながっています。地域の人にとっての『あたりまえ』の暮らし、それが、私にとっては『古いようで新しい暮らし』でした。その流れの上に今後暮らしていきたい。それが3年間地域で暮らしてみても自然と出てきた私の中の結論でした」とまとめた。

### (3) 3年間の成果

3年目の成果発表会で、地元の方から感想が寄せられた。90歳のおばあちゃんは、「若い人から見て里美がこんなに魅力あるところと聞いて、生まれて初めて『里美に住んでよかった』と思った」と話してくれたそうだ。また、あるお母さんは、「今までは、自分の息子や娘に、『里美に帰ってきて何も無い、食べれないから帰ってくるな』と言ってきたが、今日の発表を聞いて『一緒に住もうよ、帰ってこいよ』と心から言うことが出来そうだよ」と言われ、その言葉に長島さんは、大いに感動したそうだ。

地元の若者たちも変わった。長島さんは、「『何かしたい、地元のために何かしたい』という漠然とした地元の方々の想いを形にするための後押しをしました」といい、その1つとして前述した「里美珈琲」を例にあげた。「里美には、企画をする人はいますが、一歩踏み出して実際に計画し実行する人がいませんでした。そこに、『地域おこし』を仕事にする私たちがお手伝いすることで、一歩踏み出せたようです。そして、小さな成功体験を積み上げることで自信が付き、誇りを持てるようになってきたように思います。私は、自分たちの役割を地域の『触媒』、『伴走者』と言うことが出来ると思います」と総括された。

さらに、長島さん自身にも変化が見られるようだ。両親からは「3年間で変わった」、友人からは「表情がやわらかくなった」、「健康そうになった」、「生き生きしている」、「楽しそう」などと言われたそうだ。明るく、嬉しそうに話された。

### (4) 今後の展開・夢

長島さんは、最後に、こう結ばれた。「『地域おこし協力隊』のメンバーとして、ここに住むことが一番の地域貢献であると思っています。『恩返し』として、これからもこの地域に係わり続けることが当初のメンバー3人の共通の思いです」。そして、当初のメンバーは全員、常陸太田市に定住している。長島さんは、「3年間で行ってきた食の取組みと教育プログラムを作る仕事を今後も事業展開したい」と抱負を語る。他のメンバーも市内で就職したり、里美地区に住みながら都内の大学院に通ったりしている。

長島さんは、これからの夢として、「『未来に攻める仲間を作る』ことを実践したい。日本の中山間地域は様々な課題を抱えているし、日本全体としても今すぐに向き合い取り組むべき課題が山積している。危機感を持って、よりよい日本を次世代に引き継ぐために、自分と地域にしっかり向き合い、主体的に生きてゆきたい」と、しっかりとした口調で結んでくれた。



今後の夢を語る長島さん



古民家「荒時邸」にて地元のお母さんたちと

## ■むすび：「地域活性化」に果たす「女性力」と「女性活躍推進」に向けた課題

### (1) 事例にみられる「女性リーダー」の特性

以上の11人の「女性リーダー」には、共通した「女性力」を見ることができる。

第1は、性格が明るく、生き方が前向き・積極的で、「他人を巻き込む力」が強いことである。今回取り上げた11名の方、ほぼ全員に共通して見られた特性であった。

第2は、「ネットワーク構築力」が強いことである。一般的に、女性は人と群れることが好きで、人の輪を広げる力が強く、仲良しクラブづくりも得意であると言われている。本稿で取上げた11名の方々も、前向きで積極的な行動力を発揮されて、広く全国的なネットワークを形成されている。「人との出会いが財産」(事例7)、「外部の友人から学ぶことが多い」(事例4)等、ネットワークの効用は大きいものと思われる。また、一部の方は、facebookなどSNSを活用してネットワークを拡大されている。

第3は、女性らしい「気付き」や「発見力」が強いことである。女性の知恵と感性が商品開発(事例1、事例5、事例7等)やサービス開発(事例2、事例3、事例6、事例9等)や地域活性化(事例4、事例8、事例10、事例11等)に活かされた事例を本稿でも見ることが出来た。

第4は、「反発のエネルギー」をバネにして地域社会に溶け込み、活躍する力を有していることである。「よそもの」として、「女性」として、地域の保守的で閉鎖的な社会に入り込もうとするときに多少なりとも軋轢があるものだ。そうした状況にめげることなく、我慢強く、粘り強く生きてこられた方が多い。「よそもの」として地域に入り、地域で不可欠のリーダーになった方(事例4、事例7、事例8、事例10、事例11等)、「女性事業家」として差別を受けたこともあったが見事にはねのけられた方(事例3)など、「反発のエネルギー」を上手に活用された方が多い。

第5は、女性の優しさをベースに、「女性を支援するパワー」や「女性を守り高め合うパワー」を有していることである。本稿で取上げた11名全ての方々共通した点である。仲良しクラブ作り(事例9)、女性ネットワークの構築(事例4)、子育て女性の応援(事例1、事例10)、主婦力のサポート(事例2)、女性力を活かした起業(事例1、事例2、事例3、事例5、事例7)、シニア女性の生きがい創造(事例5、事例6)等、多くの事例が見受けられた。

第6は、家族の理解と協力が得られていることであ

る。「女性リーダー」として、自らの「ワーク・ライフ・バランス」を確保しながら活躍するために、主人の理解と協力、家族の理解と協力、両親との同居と協力等が支えになっておられた方が多い。

### (2) 事例から得られた「教訓」

「地域活性化」に果たす「女性力」の大きさや役割等について、今回取り上げた11の事例から学ぶこと、「教訓」とすべきこと等を、簡単に整理すると以下のようになる。

第1は、「女性リーダー」の存在、そしてその活躍が、地域を活性化させることである。一般的に、「地域活性化」の主役として「よそもの」「わかもの」「ばかもの」の3つがあげられる。「よそもの」の気づき、「わかもの」の情熱、「ばかもの」の行動力などは「地域活性化」や「まちおこし」「まちづくり」に重要である。さらに、それらに「女性」が加わることになろう。

第2は、「よそもの」や「女性」による「気づき」や「ネットワーク拡大」が、地域がもつ「保守性」や「閉鎖性」や「後進性」を打破し、地域社会を活性化させることである(事例3、事例4、事例7、事例8、事例10、事例11)。特に、本稿の事例11のように、「よそもの」&「わかもの」の「地域おこし協力隊」が、地域に入り込んで数年間、地域おこしの活動をすることによって、地域内の「子どもたち」「若者たち」「お母さんたち」「お年寄りたち」と、すべての人たちを「活性化」した事例は、「地域活性化」や「地域おこし」の将来に一縷の希望を与えてくれる。

第3は、「女性の活躍」が「地域社会やまちを変える」ということである。シャッター通りとなり寂れてきた商店街に人通りが増え、若い人が戻り、賑わいが出てきた(事例9、事例10)、まちに観光客や買い物客が増え、周辺の商店や飲食店も繁盛するようになった(事例6)等があげられる。また、東日本大震災では茨城県も東北3県に次ぐ被災地として、大きな被害を受け、現在でも農業漁業や観光業などでは「風評被害」に苦しんでいるが、その「復旧・復興」に果たした「女性力」も見逃せない。直接被害を受け、80日間でお店を再開した大洗の高橋さんたち(事例6)、震災後、観光客が途絶えた大子の町で商店街の復興を支えた田中さんたち(事例9)等、本稿でもいくつかの事例が見られた。

第4は、農林水産業の「6次産業化」(加工場・直売所・農家レストラン等)や「地産地消」には、地域の「女性力」、特に「シニアパワー」の貢献度が大きいことである。農村における地域の農産物の「加工」(事例5、事例7)、「直売所」(事例5、事例6、事例7)、「農家レ

ストラン」(事例6、事例7)等で、笑顔が魅力的な「若さ」溢れる「シニアクラス」の「女性」が活躍している。地域の女性が、農林水産業の「高付加価値化」戦略である「6次産業化」や「地産地消」や「都市農村交流」・「グリーンツーリズム」等を地道に実践している。

第5は、「反発のエネルギー」を持つ「元気な女性」が、地域コミュニティや地域社会や地域産業を再生させるということである。

本稿で取上げた事例は11事例にすぎないが、それでも、これだけ多くのことを「教訓」として学ばせて頂くことが出来た。こうしたモデルとなる「女性リーダー」にならって、「地域活性化」がより一層進展することを期待したい。

### (3) 「女性力」活用推進の課題・提言

最後に、「女性力」活用推進の課題を整理してむすびとしたい。

全般的な課題としては、①配偶者控除等税・社会保障制度の見直し、②女性の起業支援(メンター、創業セミナー、創業支援融資)、③女性の再就職支援(相談窓口・カウンセリング・斡旋紹介・セミナー)、④女性就労促進のためのインフラ整備(託児所・保育所・学童保育・介護施設)、⑤勤務態様の改善(子連れ出勤・育児休暇取得率向上・ボランティア休暇取得)、⑥男性の意識改革・家族の理解協力、⑦女性の管理職登用推進等があげられる。

特に、「地域活性化」との係わりにおける課題としては、①都市農村交流推進による交流人口拡大、②SNS活用による情報の共有化と発信、③主婦力の活用(テレワーク、在宅勤務、時短勤務等)と起業化支援、④シニア女性の自立支援と後継者育成支援、⑤市民・ボランティア活動に対する企業・自治体の理解と支援、⑥多世代同居のサポート、⑦婚活、出会いの場の設置支援等があげられよう(順不同)。

茨城県は、首都圏から近くビジネスチャンスや人との出会いのチャンスに恵まれている。農業は全国第2位の規模であり、工業集積も大きい。こうした恵まれた経済環境を捉えて、茨城の「女性」は今以上に就労に向けた努力をすべきであろう。茨城県は「高齢者近住率(高齢者と子どもが近くに住んでいる割合)」が山形県に次いで全国第2位と上位にあり、女性が就労しやすい環境にある。その上、茨城県には、つくば市の「モーハウス」(事例1)や「エデュケーションデザインラボ」(事例2)のように、女性が就労しやすい環境づくりを実践している「モデル企業」があり、常陸太田市の「特定非営利活動法人 結」(事例10)

のように、地域の子育て支援に取り組むNPO法人もある。そして、女性が社会に出てネットワークを作ることの楽しさや喜びは、事例の中で沢山語られている。地域社会、地域産業に係わりを持ち、地域の産物や商品やサービスを求め、「地産地消」から始めて、地域の良さを口コミやインターネットで友人・知人に広めて行くこと、これが「茨城の女性の、茨城の女性による、茨城の女性のための『地域活性化』」につながる第一歩であろうと思われる。

そして、事例から学んだように、たとえ女性個人であれ、少人数の女性グループであれ、熱意と決意を持って「地域活性化」に取り組んでいけば、地域社会を動かし、変えることができる。大きな変化は小さな変化から始まるといわれる。

## ■ 謝 辞

茨城県の橋本昌知事、山口やち副知事はじめ茨城県の関連部局の皆様方に貴重な御助言をいただきました。記して謝意を表します。特に、事例のご紹介やアレンジの労を取って下さった「女性職員」の皆さま(知事公室女性青少年課副参事・高島聖子氏、企画部県北振興課主事・木村朋世氏、商工労働部中小企業課課長補佐・伊藤里枝氏、農林水産部農地局農村環境課課長補佐・大塚弘子氏、農村環境課主任・根本美和子氏)に改めて感謝を申し上げます。また、民間では、(株)つくば研究支援センター総務企画部次長兼創業支援室長・石塚万里氏、広沢グループ 広沢土地倉庫(株)取締役営業部長・本多美佐江氏、(株)常陽リビング社出版事業部編集局長・仲沢二三子氏に、心より感謝を申し上げます。



## 【インタビュー】

## 茨城県における「女性活躍推進」について

茨城県副知事 山口 やちゑ 氏

## (プロフィール)

昭和26年1月生まれ。  
 昭和48年3月 茨城大学教育学部卒業。  
 昭和48年4月 公立学校教諭(県立鉾田第二高等学校勤務)採用。  
 平成元年9月 県立婦人教育会館社会教育主事。  
 平成7年4月 福祉部女性青少年課課長補佐。  
 平成12年4月 広報広聴課副参事。  
 平成13年4月 保健福祉部高齢福祉課介護保健室長。  
 平成14年4月 保健福祉部高齢福祉課長。  
 平成16年4月 知事公室秘書課長。  
 平成18年4月 知事公室長。  
 平成20年4月 保健福祉部長。  
 平成22年6月 副知事。  
 平成26年6月 副知事(再任)。



茨城県副知事 山口やちゑ氏

(聞き手) 筑波総研株式会社 主席研究員 熊坂 敏彦  
 研究員 富山かなえ

この度は、茨城県副知事に再任されましたこと、誠におめでとうございます。山口副知事は、平成20年に茨城県政史上初の女性副知事にご就任され、橋本知事の片腕として県政全般を支えてこられました。本日は、現在、当シンクタンクにて調査中の「茨城県における女性活躍の現状と課題」につきまして、山口副知事に茨城県で活躍される女性の代表者の一人としてお話を伺わせていただき、併せて、副知事2期目に際しての抱負をお聞きいたしたく存じます。よろしくお願いいたします。

最初に、政府の「新成長戦略」の中で、「女性活躍推進」が大きなテーマとなっておりますが、わが国の社会経済における「女性」の地位や社会進出について、山口副知事が日頃お考えになられていることをお教えください。

日本の女性は非常に優秀ですが、残念ながらその能力を社会に活かしているとはいえません。

「男女共同参画」に関する国際的な指標にHDI(Human Development Index)「人間開発指数」というものがあります。これは、①平均寿命、②教育水準(成人識字率と就学率)、③1人当たり国民所得等を用い

て算出した人間開発の達成度を示す指数ですが、日本は世界187カ国中10位という高位にあります。しかしながら、GGI(Gender Gap Index)「ジェンダー・ギャップ指数」という「経済分野」、「教育分野」、「政治分野」、「保健分野」のデータから算出した男女間の格差を数値化した指数でみると、世界136カ国中105位と低位にあります。特に「経済分野」は104位、「政治分野」は118位という低さです。このように、日本の社会経済における女性の活用は発展途上国にも及ばないといった実態があります。

一昨年来日されたIMF(国際通貨基金)のラガルド専務理事は、「日本の発展は女性の活用にかかっている」と述べておられましたと同感です。そのためには、女性が子供を産み、そして働き続けることができる環境整備が必要であり、保育所や育児休業など制度的整備はもとより、家庭生活や子育て、そして介護など、人生のあらゆるステージにおいて男女が共に尊重しながら支え合うという「男女共同参画意識」の浸透が大切であると考えます。

「男女共同参画社会」の推進、男性・女性の役割のボーダレス化、女性の社会進出などにおいて、山口副

知事が「理想」とされる国はございますか。また、わが国は、そうした国々からどのような点を学ぶべきでしょうか。

北欧諸国は、「ジェンダー・ギャップ指数」で上位を占めているなど、「男女共同参画」の分野では先進国であると言えます。例えば、スウェーデンにおいては、女性の就業率が82.5%とOECD加盟国中1位です。待機児童もほぼゼロで、保育園と幼稚園を統一した教育省管轄の「就学前学校」で質の高い子育て支援も受けられます。また、フィンランドにおいても、男性の積極的な育児参加などが知られております。北欧諸国には日本も見習うべき点が多々あるように感じます。

日本の育児休暇の取得率は、女性が83.6%に対して男性は1.89%という低さです。法制度は整っていても、それが使われていません。日本の男性の頭の中には「男は仕事、女は家庭」といった「伝統的価値観」が未だに存在するように思えます。これに対して、北欧諸国では男性も育児休暇は「必ず取る」という風潮が強く、取得率も高くなっています。ノルウェーでは、女性94%、男性89%、スウェーデンは女性87%、男性78%という具合です。

勉強になります。ところで、わが国政府も、「新成長戦略」の中で「女性の活躍推進」を重視し、また、茨城県においても今年度の主要施策の一つとして「女性が輝く社会づくり」が掲げられています。副知事のお立場から、同施策に関して抱負やビジョンなどをお聞かせください。

政府の新しい成長戦略の骨子では、重要な働き手として期待する女性が仕事をしやすい環境を整えることが柱の一つとなっています。

茨城県といたしましても、本年度新たに「元気な女



性応援事業」を立上げます。女性起業家や経済界、労働界をはじめ様々な分野の委員が結集して女性のキャリアアップ形成や起業を目指す女性の支援について検討する「ウイメンズパワーアップ会議」を7月に発足させます。筑波銀行の植木誠副頭取にもその会議のメンバーに入らせていただいております。各分野・各方面の委員の皆さんに提案をしていただき、提言をまとめていただく予定です。このような広範な関係者に参加いただき女性の活躍を応援するための会議の設立は全国でも早い方ではないでしょうか。この他、創業支援やキャリアアップに関する講座やメンター（助言者）制度設置などを予定しています。また、従来から推進していた「ハーモニートップセミナー」や「女性の管理職への登用推進等」も継続して推進してまいります。

これらの施策を通して、茨城の女性がその能力を発揮して社会に参画し、活躍できる「女性が輝く社会」を目指していきます。

山口副知事は、茨城県政初の「女性副知事」という「要職」にご就任されましたが、就任当時のご感想や、その後「女性」としての立場で意識されておられることや心がけておられること等をお教えください。

特に女性であることをことさらに意識はしませんでした。しかしながら、自ずと「女性」としての感性はいろいろな面に出てくると思われます。それはそれとして、あくまで自然体で物事に向き合ってきました。そして、女性としての肌感覚を大切に、県政が県民の皆様身近に感じられるよう県民の皆様と県政の「橋渡し役」ができればと考えております。副知事として、知事をサポートし、県民主体の県政を展開できればと考えています。

秘書課長になった時に「何だ女か」と言われました。ところが、2年経過して3年目に男性の課長と交代した時には「何だ男か」と言われたそうです。女性の活躍が定着すると世の中は変わるものです。副知事に



インタビュー風景



なって4年経過しましたが、女性でもいいと思ってくださる方が増えてきたような気がします。私の取組みが、若い人たちの励みになれば良いと思っております。

副知事は、「妻」として「母」として「職業人」として、ご自身の生き方について、どのように「バランス」をとってこられたのでしょうか。ご苦労されたことや工夫されたこと等もお教えてください。

私の人生の中で最も大きな存在は、今は亡き母の存在です。母は私が1才の時に夫（私の父）と死別しましたが、激動の時代を「職業婦人」として生き抜いてきました。家業として夫（父）から写真業を引き継ぎ、80代になるまで仕事をしておりました。そして晩年は、私の子ども達の祖母として「子育て」を一手に引き受けてくれました。私は、母に支えられながら「仕事」と「子育て」を両立することができたと感じています。

私には息子と娘がおり、現在、息子はサンディエゴにおりますが、先日、母の命日に息子から私にメールがあり、「おばあちゃんの墓参りをお願いします」と言ってきました。今でも育ててもらった“ありがたみ”は忘れていないようです。一方、私は、母が生きる間に親切に出来なかったことが心残りです。

私の人生の「転機」は、38歳の時でした。県立高校の教師を16年勤めた後、茨城県女性プラザ（当時の県立婦人教育会館）に異動となり、土曜日曜も出勤するようになりました。当時、息子は小学6年生、娘は小学3年生でしたが、母と並んで夫にも子育てに協力してもらいました。また、このとき女性プラザで接した方々は皆、学習意欲がある私より年長の女性が中心で、多くのことを学ばせて頂きました。このときにお付き合いのあった方々は20年後の現在も、皆、自立して美しく素敵に生きておられ、全く老いを感じさせない方々です。

若い世代の女性に対して、何か「メッセージ」がございましたらお願いいたします。

ことさらに女性であることの不利益を嘆くより、女性であることの優位性や発想の柔軟性を大切にし、性差にとらわれることなく、何事にもプラス志向で向き合ってもらいたい。そして、どんな体験も何ひとつ無駄になるものはないと考え、いろいろなことに果敢にチャレンジしてほしいと思います。

若い女性の立場から、富山さん、何か山口副知事にお聞きしたいことはありませんか。

（富山）はい、ご質問させていただきます。女性が自分自身の持つ強みに気づき、そして、自分自身の可能性を広げるためには、どのようなことが大切なのでしょう。

私が大切にしてきたことは、「人との出会い」

です。今の時代は情報が大事ですが、人脈やネットワークを広げることがその人の可能性を広げることにつながります。「人との出会い」は、後になって意味を持ってくることが多いような気がします。人脈を大切にし、人との交流の輪を大きくしておく、人から相談されたときに応える力もついてきます。そして、「女性でないと出来ないこと、女性だから出来ること」にも目を向けていくことも重要でしょう。

最後に、副知事の「座右の銘」や「好きな言葉」をお教えてください。

一つは、「不易流行<sup>ふえきりゅうこう</sup>」という言葉です。世の中にある変わらないものと絶えず変化していくもの、その根本は一つであるということで、松尾芭蕉が「奥の細道」の旅を通じて体得した「俳諧の理念」です。また、鴨長明の「方丈記」の冒頭に、「行く川の流は絶えずして、しかも、元の水にあらず」（川の流は絶えることなく不変であるが、元の水ではなく刻々と変化している）に象徴される一節もあります。「不易流行」という言葉は、「伝統を大切にしながらもその中に新しいものを求めていく姿勢」にも通ずるものと思います。変わらないように見える中にも変化がある、伝統の中に新しさを求めて行く、そのような生き方を大事にしたいと思っています。

二つ目は、「無用の用」という言葉です。20代ころから好きな言葉でした。中国の老荘思想の中にあるものですが、一見無駄に見えても無くてはならないものを指します。「効率化」で何でも削ぎ落としてゆくような風潮は寂しいものです。「ゆとり」も必要でしょう。一見無駄なものを大切にする事で人間関係もうまくゆくことがあります。



山口副知事（左）と富山かなえ（右）



私の生き方は、流れに逆らわずに流れに身を任せて自然体で生きることですが、これも老荘思想に通じるものかもしれません。

本日は、お忙しい中、貴重なお話をお聞かせいただきましてありがとうございました。山口副知事のますますのご活躍をご期待申し上げます。

(平成26年6月30日)



インタビューを終えて  
(前列左より筑波銀行顧問・石原朝雄氏、山口副知事、  
筑波銀行上席執行役員地域振興部長・松本昭弘氏。  
後列左より研究員・富山かなえ、主席研究員・熊坂敏彦)

「産業レポート」のバックナンバー

調査情報誌	産業レポート
関東つくば銀行 調査情報 2009年10月号 No.24	茨城県における「農商工連携」の可能性について 和郷園にみる革新的農業経営
関東つくば銀行 調査情報 2010年1月号 No.25	茨城マグネシウムプロジェクトの成果と今後の課題 新たな地場産業の生成：ひたちなか地区のほしいも産業
筑波銀行 調査情報 2010年4月号 No.26	茨城らしい観光振興への取組み — 笠間市の地域密着型ニューツーリズム— ローカルエネルギーシステム再考
筑波銀行 調査情報 2010年6月号 No.27	つくば発ベンチャー企業の現状と課題 茨城県内の元気な商店街とその成功要因 —つくば市北条商店街と常陸太田市鯨ヶ丘商店街の事例—
筑波銀行 調査情報 2010年9月号 No.28	茨城県の石材地場産業の現状と課題 山形カロッツェリア研究会にみる地場産業産地の革新
筑波銀行 調査情報 2011年1月号 No.29	関東二大陶磁器産地の特性比較 — 笠間焼産地と益子焼産地— 茨城県内企業の中国進出の現状と課題 —上海進出企業向けアンケート調査を中心に—
筑波銀行 調査情報 2011年3月号 No.30	結城紬産地の現状と課題
筑波銀行 調査情報 2011年7月号 No.31	東日本大震災の特徴と復興に向けて —茨城県との係りを中心に— つくば発グリーンイノベーション —微細藻類エネルギー革命—
筑波銀行 調査情報 2011年10月号 No.32	茨城農業の特徴と革新への取組
筑波銀行 調査情報 2012年1月号 No.33	茨城・栃木における地域ブランド力向上に向けた取組み
筑波銀行 調査情報 2012年4月号 No.34	清酒製造業の現況と老舗企業の革新への取組み—茨城・栃木両県を中心に—
筑波銀行 調査情報 2012年7月号 No.35	日立・ひたちなか地域の「ものづくり」中小企業の特徴とサバイバル戦略の方向性 東日本大震災被災地における新たな「まちづくり」の息吹き —宮城県南三陸町の事例を中心に—
筑波銀行 調査情報 2012年10月号 No.36	再生可能エネルギーの可能性と利用拡大に向けた取組み —茨城県における取組み事例を中心に—
筑波銀行 調査情報 2013年1月号 No.37	茨城における新時代対応型中小企業 —経営革新への取組み事例（その1）—
筑波銀行 調査情報 2013年4月号 No.38	首都圏近郊の賑わいある「まちづくり」の取組み —柏市における「まちづくり」の特徴と仕掛け人たち—
筑波総研 調査情報 2013年7月号 No.39	地方自治体における「地域ポイント制度」の新展開
筑波総研 調査情報 2013年10月号 No.40	「同時多発型・笠間モデル」 —笠間市の先進的で多様な地域活性化への取組み— 「ギャラリーロード」で見られる革新的な「まちづくり」の取組み —笠間焼産地における「産地革新」との係わり—
筑波総研 調査情報 2014年1月号 No.41	ASEANの中心国・タイの投資環境と日系中小企業の進出状況
筑波総研 調査情報 2014年4月号 No.42	「地域活性化」における「地域の酒」の効用 —茨城県の取組み事例と課題を中心に—

## 調査情報 No.43

2014年8月 発行

発行 筑波総研株式会社

〒305-0032

茨城県つくば市竹園1丁目7番

電話 029 (829) 7560